孔子は「必ずや名を正さんか」「名正しからざれば事從はず」と申されたが、誠に至言である。

○鬼神。　大體解釋の處に述べて置いたが、古今和歌集の序にも、「目に見えぬ鬼神をあはれと思はせ」の文句がある。是は全く、當時の想像的鬼神で、神變不可思議な怖ろしい靈異を、心にゑがく偶像に外ならぬのであるが、其を利用して、不敵な强盜などは、無智な民衆に害を與へた事が少なくなかつたらしい。故に、時折見識の優れた人や、勇猛の士が出て、大江山の鬼退治などが起つたのであらう。

○消え惑へる氣色いと心苦しくらうたげなればをかしと見給ひて。　是が、一方の論者の、「人間は半面は神であり、半面は惡魔である」と言つた所である。人の行爲の至誠・高潔・博愛・仁恕の高潮に達したものは、全く、理想の神に殆ど近いものであり、是と反對に至つた時は、全く、正銘の惡魔である。で、源氏が空蟬の極度に困却した狀を見て、氣の毒だ可憐だ、が併し、其が又たまらなく興味津々たるものがあるとやうの感じは、やはり、多少男性に有する獸性の存在で、撲滅すべき點たる事を免がれない。極言すれば、猫の鼠を捕へて弄び、その苦痛の鳴き聲を翫味するのに似た所がないでも無からう。故に之に對する女性は、又一種非常に强い所がなくてはならないのである。

源氏の家人として、殊に、忠實なる老臣伊豫介の留守に、偶然なる方違の際、夜話に聞いてゐて、ふと思ひ出した衛門督の女、現在、介の妻なる者を强ひて連れ來りてかき口說き、まことしやかに、甘言を以て彼の女を誘惑するが如きは、如何に、戀愛の自由、否、或意味に於ては之を禮讃したかの如き當時に在りても、決して善からぬ事であつたには相違ないが、若しも、是が武門時代だつたら、暴君が亂行の大なる一つの出來事として非議せられ、忠臣の耳にでも入つたならば、恐らくは直言諫止し、聞かれずば死を以てする、即ち、切腹騷ぎも或ひは起つたかもしれぬ。

所が、當時は源氏、即ち御當人は勿論、他からそれを仄聞したとしても、恐らくは、大した騷動にはならなかつたであらう。惟ふに、源氏の考は「可愛想に父母に別れて、家斷絶の如き狀態に置かれた若い女性が、愛弟と共に嫌々ながら、觀念の目をつぶつて、自分と同じ年、若くは年長の、繼子の澤山ある老人の受領に嫁した。彼は父在世の頃には、帝に奉らうとして、帝も亦、御默許になつた程の女子である。嘸辛い事だらう。よし。自分が一つ慰藉して遣はさう。可愛がつて喜ばせもしよう」位に考へ、存外、いゝきな自分免許の行動に出られたのかも知れぬ。所が、彼の女は存外であつた。老夫介に對しては、更に愛を感ずる事無く、嫌々のつとめに過ぎないで居るに相違ないから、急に歡迎愉悅を感じない迄も、これほど素氣無くはあるまいとの、想像は裏切られた。草木も靡くものと、源氏自身が自己の魅力を信じ切つて居た。その誇を傷けられたのだから、今度は、少し負けぬ氣も手傳つて、どうでもかうでも、一旦は是非我が意に從はしめようと焦る事になつたのであらう。けれども、源氏は天性同情心の深い人である。一時は我が思ふ樣にならなかつた空蟬を、恨みもし憤りもされたが、夫亡き後に、繼子達に冷遇され、又横戀慕されて、寄るべ無きあはれな狀態となり、漸く出家して、一方の汚濁な懸想を遁れ

た彼の女に、ひどく同情して、二條の東の院に引き取り、其の生涯を、清く安らかに終らしめたが如きは、うるはしい行爲といふべきである。

是を、足利幕政最初の高師直が、鹽谷高貞夫人への横戀慕不調の結果に對する、殘酷狂暴の措置をした事に比すれば、大に恕すべき點があらう。つまり、平安朝の短所は、軟弱弛緩より、漸次衰頽を來たした事であらうが、足利時代の亂暴殘忍なるよりは、蓋し、その增ること數等であつたらう。

斯くの如き時代に在りても、物はかなげにか弱くおぼゆる女性に、存外毅然として折れ難き所のある者が、隨分少なく無かつた。それ則ち、全く日本女性の天性に出でたものであらう。而して、かく立派な行動を取つた事は、頗る愉快を感ずる次第である。

源氏が、侍女の中將に出會はれた場合の樣子は、全く當時の貴公子、即ち、驕兒の態度が、まざ〳〵と能く寫されてある。屹驚して動ずるどころか、「おい〳〵」と侍女に聲をかけて、「汝は明方にお迎へに來ればよい」(今用は無い)と言つた風の行爲で、平氣で、ぐん〳〵空蟬を自分の御座所へ連れ込まれても、受領の後妻の侍女位で、殊にその夜は、女主人の繼子の家に寄寓中である。滅多に人に騷がれても困る。膽を潰してうろ〳〵しながら、どうする事も出來ない。又、空蟬は空蟬で、か弱い身を、源氏から羽がひじめにされて居る。當面の心痛はさて置き、此の侍女の思わくをさへも恥かしく、辛く氣がねして、困却の極度に達した狀も細かい。

空蟬は、がた〳〵戰慄して、殆ど齒の根も合はぬ程の狀態で、やつと言ひ出した言葉は、併し、なかなか確乎して居り、且、貴婦人らしくある。「うつゝとも覺えずこそ云々」、即ち「唯夢の樣で、現在の事とは思はれませぬ。如何に受領風情の妻だとて、人妻は人妻であるのに、是程迄にお見くびり遊ばした、全く女性の體面を蹂躙なされたお仕打を、何うして淺くお思ひ申上げられませう。深刻にお恨み致します。我々の低い身分階級は階級で、そこにもそれ相當の意があります」とは、何といふ强硬な返答であらう。此の可憐な、軟弱な小柄女の口から出たとは思はれない。全く、有髯の男子も面を向けたら燒き盡されさうな、萬丈の氣焰が、而かも嫋々たるたをやかな態度で、消え入る樣な細い聲から響き出したのは、「いと心苦しく」はあるが「らうたげ」で、「をかし」と、優越權を握つてる、男子の目からは見られたであらう。

そして、空蟬の態度を、「人柄のたをやぎたるに、强き心を强ひて加へたれば、なよ竹の心地して流石に折るべくもあらず」とは、是亦、誠に巧妙な筆づかひである。

この意味は、丁度なよ竹を折らうとしても、折れさうでなか〳〵折れない。空蟬に懸想の心は、狂はむばかりで、殆ど、理性を失ひさうになるけれども、やはり自分が思ふ樣に、無理もしようとする氣にはなれないといふ意である。是で、即ち女性の毅然たる、自衞心の强烈なる時には、優勢强力の男子も蹈み込めないものである事が證據だてられる。況んや、狂暴性の持主では無い源氏に於けるをやである。

當時、情趣を解せぬものは、殆ど、紳士貴婦人の資格が無いとして取扱はれた習俗である。故に、清少納言も其の意味を書いて、當方でまだ、諾否の返事に決心のつかぬ間の、懸想人からの手紙でも、折節あはれなる際(即ち情趣の深い場合)に返事をしてよこさぬのは、心づき無いものであると言つて居る位である。然るに、空蟬は「すくよかに心づきなしとは見え奉るとも、さる方のいふかひ無きにて過ぐしてむ云々」とある。全く、人間社會からは取除者になり、趣味の殿堂からは突き落されても、身を守り通さうとしたのは、勿論、我は人妻なりとの、守節の心も含まれて居るには相違ないが、「いと類なき御有様の、いよ〳〵うち解け聞えむ事わびしければ」といふ氣分の非常に強く働いてゐることと、最も深く味はれなければならない。即ち、嘗て力說して置いた様に、品位格式を大切に保護する爲、女性の誇を傷けられない爲といふ所に、當時の婦人が、どんなに深い覺悟をもつてゐたかは、想像に難からぬのである。此の氣高い心は、今も欲しい。本當に失ひたくない。空蟬は自分をふり返つて見た時、第一、當時尤も喧ましい地位が伴はない。容貌は優れて居ない。體力は弱い。教育の程度も比べものにはならぬ。そして、老受領の後妻である。源氏が一時の好奇心にそゝられて、よし、一旦は愛して見ても、何として終生その愛がたもたれよう。始終氣が引けつゝ、悒々としながら、他の人後に立つて、あるに甲斐ない世は過ごしたくない。といふ考を、能く見るべきである。是では、どれほど巧妙な煽動にも乘る筈が無い。

某不良兒の口供に、「いかなる人が一等誘惑しにくいか」と訊はれた時、「煽動に乘らぬ人ほど、面倒なものはない」と言つたとの事である。如何にもさうであらう。源氏物語中の然るべき女性は、大抵、殆ど煽動に乘らない。頗る興味ある事では無いか。

○心苦しくはあれど、見ざらましかば口惜しからましと思す。　是が、先づ大抵の男子の心持である。空蟬が極端に困つて恨んで、ひた泣きに泣き通してゐるのを、元來同情の深い源氏は、可愛想だとは思つて居られる。けれど、始めて逢ひ見た中流階級の婦人、非常に好奇心を滿たされて、「珍らかなり」との興味を感じたので、會はなかつたら殘念であつたらうに、好い事をしたとは、心苦しいと思はれる心とは矛盾して居るが、斯ういふ事は、男性が本能的野性の名殘として、今でも持つて居るのである。是を打破し、箝制するものは、自ら修養し得たる道德の鐵槌より外に無い。道德の力が漸々強くなると、何處かに潜んで居た良心が擡頭して來る。その時には、此の矛盾は無くなるのである。但、此の書き方も、少しく矛盾的である。「なよ竹の心地して流石に折るべくもあらず」といふ語から見れば、空蟬は、源氏の熱情のすべてを峻拒し得た事になり、「見ざらましかば口惜からまし」の方面からすれば、逢つたと言ふ意味の事にもとれる。即ち、斯ういふ所の「見」は「逢」の意に、大抵、取つて居るからである。

○いとかく憂き身の程の定まらぬ云々。　誠に空蟬の情を寫し得て、あはれに面白い。殊に、後段の「女、身の有様を思ふに云々」は、尤も能く、細かい深い情を寫してあり、此に於いて、空蟬が如何に

實直な心情、曇無い良心を所有して居た女性であるかといふ事を說明し盡して居る。空蟬は、わが身を顧みて冷靜に考へて見ると、何から何迄、どうしても源氏とは釣合はない。其も公卿の息女として の、處女の間ならば兎も角も、今は老受領の妻である。到底末遂げ難き身の、流石に、品位格式に傷けたくはないといふ、例の、當時の女性が誇を考へて居る。だから、どんなに深切な詞の限をお盡しになつて、何を仰つしやつても、ちつとも有難いとは思はれない。といふのは、隨分確乎とした心の持主であらねばならぬ。そして、普段はすく〳〵しい老年の夫で、寧ろ嫌だ、厭はしいと思つて居た人であるけれども、兎に角、世にも許され、自ら許した夫である。不貞の女といはれたくは無い、それ即ち、誇に傷けるものといふ良心の光に照らされて、伊豫の方のみ思ひやられて、若しや夫の夢にでも、此の狀態が見えはすまいかとの疑惧は、流石に正しき、うら若い婦人の可憐の心ざまが見えて、あはれに感ぜられるでは無いか。

此の自己を知る所の明が、存外に、當時の女性に少なからぬ事は、能く注意すべき點であると思ふ。是あるに於いては、盲目的蹉跌は少いわけである。

○世に知らぬ。　この世は、重い意味では無い。「夜」の意に解した評釋は取らず。湖月抄にある如く、「世」と解すべきである。

源氏の、「例のいづくよりとう出給ふ言の葉にかあらむ」といふ所は、全く技巧的で、修飾的であるけれども、「世に知らぬ御心のつらさも、あはれも、淺からぬ世の思ひ出は、さまざま珍らかなるべき例かな」とてうち泣き給ふとある。是の涙は、かの平仲が空泣の涙ではない。源氏は、多情多感な性質である。眞に自らの心に任せぬ、情的方面の焦慮などには、眞から熱涙を流され、危險をも犯される。こゝに於いて、是に對する女性は、餘程しつかりした精神の基礎がなければ、ぐらつかざるを得ない道理である。

○こさうじのかみ。　〔細〕〔孟〕〔源〕等も皆「上」とあり。近來諸家のも大抵同樣である。小櫛に「紙」とあるは取らず。紙では分らぬ。（前段參照）

○光をさまれるものから影さやかに見えて。　〔德河內〕〔異本〕には顏とある。「月の顏」ともいふから、是でもよからうが、やはり影とある方による。影といふのも面影、即ち「輪廓」と解してよいと思ふ。「かげ」は、辭書に「姿」とも解して居る。顏も亦同樣である。「人影見ゆる」「人影絕えて」等も、皆人の姿の意である。夜が明け離れて、まだ日光のさゝぬ頃、眞夏の中天に、白んだ月の輪廓のはつきり見えた狀である。

有明月といふのは、〔言〕「月は天にありながら、夜の明くること」「十六夜以後の月に云ふ」「殘月」とある。たしか八田知紀翁だつたと思ふが、「有明月」といふのは、もと廿二三日後、夜明前になつて登るのをいふので、宵から出て殘つて居るのは「殘月」であつて「有明月」とは違ふ。といはれた。なる程、古

歌の「有明の月を待ちいづるかな」の如きは、曉更の月の狀態である。因みに記して參考の一端とす。

「光をさまれる」。詳しくいはば、「光の放射が鈍くなつた樣な狀態」で、「消えた」では少しくいひ盡されない所がある。

かうした光景は、いかにも靜かな、無風の京洛方面の曙の情況で、地味な、何でも無い樣な文章であるが、どうも、細かい所をよく寫してあつて、此所の源氏君の艶な、併し、他には洩らされぬ苦しい心境に、ふさはしい背景をうまく描出して居る。

○見る人から所がら。　と〔德川河內本〕にはある。意味から言へば、「所がら」のあつた方が善い樣だが、語路の調子は無い方が善い。いづれでも可からうが、先づ無い方に從つて置く。

○此の、源氏が空蟬を誘つて、一夜を語らひ明かしたといふ一段には、今古諸家の說がさまざまであるが、要するに、先づ大抵は、此の夜に於いては、無論、空蟬の意思で許したのでは無いが、情交があつたと解して居る。〔孟津〕にも他の否定說を遂に打ち消して、「一夜はわり無く從ひても、其のまゝつれ無くて已みぬる事、尤も貞節なる心にや、此の儀之を用ふ」とある。嘗ても、しば〳〵申した樣に、是が、若し武門時代以降の、節義貞操を以て第一義とした時代ならば、勿論、如何なる事情があらうとも、貞節の女性ならば、假初にも許すべきではなく、萬已むを得ずさうなつた場合には、恐らくは自殺して、我が意思の潔白を示す事であらう。さすれば、是を强ひた男子は、事實上殺人罪を敢てした事になるから、由々しき大事である。が、平安朝當時に在りては、品位格式を重んずる事が生命であつたから、あの時、空蟬が拒み切つて、大騷ぎとなつた日には、源氏はもとより、夫(よし心染まぬ男にしても)も繼子も、此の一家と主君同樣なる源氏に對し、甚だ見苦しい事が持上つて來よう。其は當時の女性の忍びざる所である。荒だてまいとすれば、拒み切るだけの力は無い。彼の女は、殊に小柄なか弱い蒲柳の質の持主らしい。故に、夢現の境に彷徨して居た突嗟の間の出來事で、其さへとう〳〵、心は打ち解けないでしまつたのである。孟津の說にも一寸記してあつた樣に、よし反意的でも、夢ばかりでも一旦逢つた人、而かも嫌ひでは無い。わが理性の制裁のみで拒否する所の君である。爾後、種々遁れ難い場合をさへ避け通して、遂に再び逢はなかつたといふ事は、尋常一樣の覺悟で出來る事ではない。故に、諸子の說にある如く、是も亦、ある一種の貞節志操の强固なる女性として、敬意を拂ふべきであらう。則ち、當時婦道の定木が、後世とは相違して居るのだから、先づ其でよからう。が、其の行爲は完全かと言はば、否と申さなければなるまい。其故世の女性たる者は、精神はもとより、體力にも是等を防ぎ得るだけの確乎たる覺悟と鍛練とが出來て居れば、是位の事に對しては、左程防拒も困難な筈はないのである。

但、此所の書き方は、極めてデリケートであつて、餘程故意に朦朧と書いてあるやうな心地がする。だから、語意の解釋も、事柄の說明も其を克く味はつて、苟くも讀者が先づ大抵に迄會得して、意味を取るのに差支の無い限は、あまりきはぎはしく說明し盡さない方が、作者の意思にも適ふ譯ではあるまい

か。ちと無理かもしらぬが、自分はこんな考へを持つ所から、語句に就いては、其の點は少しくぼんやりと解說した箇所もある。從つて不明瞭だといふ誹を受けるかと、多少不安を感じながら、特に先づかうして置く次第である。

朧月夜が、朱雀院御出家の後、更に源氏からの誘致を拒絶された時、更に源氏の考へを記して、「げに背き給ひぬる御爲、後めたきやうにはあれど、あらざりし事にもあらねば、今しもけざやかに清まりて、立ちにしわが名、今更に取り返し給ふべきにやと思ひ起して云々」とあり、そして、終に朧月夜は、それを拒み切れなかつた。然るに、空蟬に源氏が、一時は非常に熱中して居られて、さまざまにいひ動かし、又は、手紙に歌にいろ〳〵と言ひ送られた中にも、嘗て一度も、「あらざりし事にもあらねば」だの、「今しもけざやかに清まりて」等の事は露程もない。さう云ふ點から、實を申すと、自分は我田引水的で、やはり、先入主色となつてゐる故でもあらうと、自ら氣はつきながらも、ともすると、空蟬は「實事無し」の說の方に兎角引き付けたくて、從來は先づ、さういふ風に說いて居たのである。が、段々研究を積んでみると、其はやはり、少しく無理なやうにもある。併し、自分が其否定說に、嘗て引證して居つた事は、即ち、前述の朧月夜の件に比べて推し量つてみると、空蟬にはやはり「なよ竹の心地して折るべくもあらなかつた」方に、團扇が上げたくなるのである。くどく申すが、こゝは併し、やはり作者のデリケートな書き方によつて、吾等も亦、デリケートな說でばかして置く事にしよう。

殿に歸り給ひても、とみにもまどろまれ給はず。又あひ見るべき方なきを、まして彼の人の思ふらむ心の內を、いかならむと心苦しくおぼしやる。勝れたる事はなけれど、目安くもてつけてもありつる中の品かな。隈なく見集めたる人のいひし事は、げにと思しあはせられけり。

此の程は大殿にのみおはします。猶いとかき絕えて、思ふらむ事のいとほしく、御心にかゝりて、苦しく思しわびて、紀伊守

【口譯】 殿(左大臣邸)にお歸りになつても、直に御寢就きになられない。再び空蟬に逢ふべき方法も無いのに、(其を考へるだけでも苦しいのだが)況んや、彼の人(空蟬)が思ふであらう所の心の內を、どんなだらうと氣の毒にお思ひやりになる。(格別)勝れた點は無いけれども、見苦しからず取りなして居る中流(の女性)だなあ。隅から隅まで經驗して居る人、(粹者馬頭)の言うた事は(本當だ)、なる程とお思ひ當りになつた。

源氏は、近頃は、左大臣邸にばかりおいでになる。やはり、(空蟬の方へは)すつかり無沙汰をして(居られるので、果して一時的のおすさびだつたなどと、空蟬が)思ふであらうといふ事が、氣の毒だとお氣がかりになつて、煩悶にお堪へなされず、紀伊守をお召になつた。

源「あの先達の中納言(前に衞門督とある)の子(空蟬の弟)は、予にくれまいか。可愛らしく思はれたから、予が身邊に(置いて)使ふ人にしよう。殿上童として聖上にも自分が差上げる事にも

を召したり。「源彼のありし中納言の子は得させてむや。らうたげに見えしを、身近く使ふ人にせむ。うへにも我奉らむ」と宣へば、「紀いとかしこき仰せ言に侍るなり。姉なる人に宣ひ見む」と申すも、胸つぶれて思せど、「源その姉君は、朝臣の弟やもたる」。「紀さも侍らず。この二年ばかりぞかくてものし侍れど、親のおきてに違へりと思ひ歎きて、心ゆかぬやうになむ聞き給ふる」。「源あはれの事や。よろしく聞えし人ぞかし。まことによらしい)。源氏は、お側へお召寄せになつて、大層親しげにお話しや」と宣へば、「紀けしうは侍らざるべし。もて離れてうと〳〵しう侍れば、世のたとひにてむつれ侍らず」と申す。

さて五六日ありて、この子率て參れり。こまやかにをかしとはなけれど、なまめきたるさまして、あて人と見えたり。召し入れて、いと懐かしく語らひ給ふ。童心地にいとめでたく嬉しと思ふ。いもうとの君の事も、くはしく問ひ聞き給ふ。さるべをなさる。小君は、子ども心に、非常に結構な嬉しい事だと思つて居る。姉君(即ち女性の同胞、こゝは姉)の事も、詳細にお尋ねになる。然るべき事は、お答へ申上げたり何かして、此方が氣恥かしさを感ずる程、落ちついて澄まして居るので、源氏はいひ出しにくい。けれども、能く(事情を)上手においひ聞かせなさる。(小君は、源氏と姉との間に)さういふ事があるのかと、朧氣ながらほぼ想像がつくにつけても、意外の事ではあるが、子ども心に深く分別もしないで、(源氏から御渡しになつた)お手紙を、姉の所へ持つて來たので、姉(空蟬)は呆れて、涙さへも出て來た。此の子が(何と)思ふであらうと、極りが悪くて、(憤らしくもあり悲しくもあるが)、流石に(氣がかりで、見たくもあるから)お手紙で、顔を隠すやうにして廣げて見た。細々と澤山書いてあつて、

「源見し夢をあふ夜ありやとなげく間に目さへ合はでぞ頃も經に

しよう」と仰しやるので、「紀まことに有難い御沙汰でございます。彼の子の姉にも申し聞かせて見ませう」と申すにつけても、(源氏は姉と聞いて)胸がどきりとするのをお感じになつたけれども、「源その姉君は、其方の弟(即ち子)があるか」。「紀さやうではございませぬ(子は無い)。此の二年間程、父に嫁いで來て居りますが、(宮仕を希望して居た)父親の素志にそむいて居る(受領風情の後妻になつた事)と歎いて、不愉快らしい樣子に聞いて居ります。」「源氣の毒な事だな。可なりよい評判に聞いて居た婦人だつたがなあ。本當に好いかえ」。「紀(まあ)惡くはございますまい。拙者はかけ離れて疎遠にして居りますので、世間で申す(なさぬ仲の母子は親しむべきもので無いと言ふ)響の樣に、馴れなれしくも致しませぬ」と申上げる。

それから、五六日たつて紀伊守が、この子(空蟬の弟、小君)を連れて御殿へ參上した。小君は、深みがあつて綺麗だといふ子では無いが、艶な樣子をして、上品な人と見えた(即ち貴族の子

き事は、いらへ聞えなどして、恥かしげに靜まりたれば、うち出でにくし。されどいとよくいひ知らせ給ふ。かゝる事こそはと、ほの心得るも、思ひの外なれど、幼き心地に深くしもたどらず。御文を持て來たれば、女あさましきに涙も出で來ぬ。この子の思ふらむ事もはしたなくて、流石に御文を面隠しに廣げたり。いと多くて、

「見し夢をあふ夜ありやとなげく間に目さへ合はでぞ頃も經にける。

歌意。「夢のやうなあの夜の事を、(現實にまた)逢ふ夜があるかと歎いて居る間に、目を合す事も出來ないで、(即ち眠りもせられず)日數が立つた。即ち、「逢ふ夜ありや」とは、(夢占の合ふといふ事にかけた)寢る夜が無いから(夢にも逢ふ事は出來ぬ)。ぬる夜なければ」、などと(本卷四〇九頁解釋參照)、鑑賞もし切れない程の見事なお書きぶりに、目も涙でぼんやりと曇り塞がつて、(見えなくなつて)しまつて、不思議な宿命(因緣事)のまたも加つた身を、思ひ續けて臥つて居られた。

其の翌日、小君をお召になつたので、源氏の許へ參るからと言つて、お返事を催促する。「こんな御文を拜見する樣な人も居りませぬと、お申上げなさいな」と申されると、小君は笑つて「人違なんかしさうにもおつしやらなかつたのですもの、どうして、さやうに申上げられませうぞ」といふので、空蟬は嫌な心持がして、(さては、源氏はこの子に)何もかもすつかり言つて聞かせて

寢る夜なければ」など、目も及ばぬ御書きざまも、目もきり(ふたがり)て、心得ぬ宿世うち添へりける身を、思ひ續けて臥し給へり。

またの日、小君召したれば、參るとて、御返り乞ふ。「かゝる御文見るべき人もなしと聞えよ」と宣へば、うち笑みて、「違ふべくも宣はざりしものを、いかがはさは申さむ」といふに、心やましく、殘りなく宣ひ知らせてけるおしまひになつたのだなと思ふと、際限も無い程辛い。「てもまあ。(子どもの辯にそんな)ませた事は言はないが可い。そんなら、(即ち、わたしの言つた樣に申上げられないなら)參上なさるな」と叱られて、「お召になるのに、何うして、(不參が出來ませう)」といつて參つた。紀伊守は、(實は)浮氣な心に、この繼母の樣な(あの若さで、老人の後妻となつて居るのは)あつたらものだと思つて、御機嫌を取つて、近づかうとする下心であるから、この子(小君)をも大事にして、連れて歩いて居るのである。

(源氏は小君を)側近く召し寄せて、「昨日は一日待ち暮したのに、やはり其方は、予程同じ樣に思つて居ないのだらう」。とお怨みになると、(小君は極り惡さうに)顏を赤くして居た。「何處に(返事は)」と仰しやると、「かく〳〵の次第で」と申すので、「言語同斷の事だな、呆れたものだ」と言つて、再びお手紙をお渡しになつた。「其方は知るまいなあ。予は、あの伊豫の阿爺より前に、(其方の姉には)逢つた人だよ。けれども、姉は予を賴になり

(り)と思ふに、つらき事限なし。

「空いで、およすけたる事はいはぬぞよき。よしさばな參り給ひそ」とむつかられて、「小召すにはいかでか」とて參りぬ。紀伊守好き心に、この繼母の有樣を、あたらしきものに思ひて、追從し寄る心なれば、この子をも、もてかしづき率て歩く。

君召寄せて、「源昨日待ち暮らしを、なほ相思ふまじきなめり」と怨じ給へば、顏うち赤めて居たり。「源いづら」と宣ふに、「小しかさうも無い。頸が細くて華侈だから(弱さうだ)と思つて、頑丈な後見を拵へて、こんなに予を冷遇するのだらうよ。それでも其方は、予の子になつて居れよ。あの賴つて居る人は、餘命もいくらも無いだらう」。とおつしやると、「そんな事もあつたのか、ひどい事であつたなあ」と思つてゐる樣子を、源氏は可愛らしいと思召す。

源氏は、この子(小君)を、お側に引きつけてお置きになつて、宮中へも、連れてお參りになつたりなどなされる。御自分の呉服所(裁縫所)へお命じになつて、小君の裝束なども お造らせになり、眞に親のやうに彼をお取扱ひになる。

(姉の所へは、小君をして)始終お手紙を遣はされる。けれども、(姉は思ふ)この子(小君)もまだ誠に頑世ない子どもであるから、不用意に、(ひよいと)手紙を取り落しでもしようものなら、(源氏との仲を兎や角と疑はれたりする上に、あんな子どもに密書を託して、何たる事だなどと)輕率な評判をさへも附け加じか」と申すに、「源いふかひなの事や。あさまし」とて、またも賜へり。「源吾子は知らじな。その伊豫の翁よりは先に見し人ぞ。されど賴もしげなく頸細しとて、ふつゝかなる後見まうけて、かく侮り給ふなめり。さりとも吾子は我が子にてをあれよ。彼の賴もし人は、行先短かりなむ」と宣へば、さもやありけむ、いみじかりける事かなと思へるを、をかしと思す。

この子をまつはし給ひて、内へられる事であらう。自分の世望(即ち、世の思はくも、受領の妻と運命つけられた身)は、(源氏に比べて見れば)誠に似合はしく無い事と思ふので、(いくら)結構な事でも、おのれの身分次第である。(不釣合な事の永續する譯が無い)と考へて、うち解けたお返事なども差上げない。(薄暗き火影で能くはわからなかつたが)ほのかに拜した源氏のお態度お樣子は、なる程(評判の如く)並々のものであつたか。否々、さうでは無い。(實にお立派なものであつた)とお思ひ出し申上げない譯ではないけれども、(それを思ひ知り顏に)情趣ある樣子をお見せ申上げた所が、(結局、源氏のお寵愛を受け得られべき身では無いのだから)何になるものかなどと思ひ返すのであつた。源氏君は、お忘れになる時の間も無く、(空蟬に對して)氣の毒にも亦戀しくも思召し出すのである。(あの晩、空蟬がひどく辛く恨めしさうに)思つて居た容態などのいちらしさも、(源氏のお心の裡から)拂ひのける方法も無い樣にお思ひ續けになる。輕率にお微行などなされて

裏にも率て參りなどし給ふ。わが御匣殿に宣ひて、裝束などもせさせ給ふ。誠に親めきて扱ひ給ふ。御文は常にあり。されどこの子もいと幼し。心より外に散りもせば、輕々しき名さへ取り添へむ身のおぼえを、いとつきなかるべく思へば、めでたき事もわが身からこそと思ひて、うち解けたる御いらへも聞えず。ほのかなりし御けはひ有樣は、げになべてにやはと、思ひ出で聞えぬにはあらねど、をかしき樣を見え奉りても、何にかはなるべきなど、思ひかへすなりけり。君はおぼし怠る時の間もなく、心苦しくも戀しくもおぼし出づ。思へりし氣色などのいとほしさも、はるけむ方なく思し渡る。輕々しく這ひ紛れ、立ち寄り給はむも、人目しげからむ所に、便なきふるまひやあらはれむ、人の爲もいとほしくと思し煩ふ。

例のうちに日數經給ふ頃、さるべき方の忌待ちいで給ひて、訪問になる事も、(あのやうに)人目の多い所であつて見れば、不都合な行爲が露顯する事でもあらう。(さすれば)自分は勿論、あの人(空蟬)の爲にも、氣の毒の事だ、(其故、どうも滅多にそんな事は出來ない)と思案にくれておいでになる。

いつもの樣に、源氏は、宮中に數日間お滯在になつて居られる時分、さうした方角を忌み避くべき折(即ち、前の方違の如き都合の好い口實を設けられる機會)、を待ち構へて、俄に宮中をお退出になるふりをして、途中から(ふと、ほんに今日は里邸も大殿も方角が惡い。方違をせねばならぬと、お氣附になつた樣に繕つて、紀伊守邸へ)おいでになつた。紀伊守は吃驚して、(かやうな處へ、度々の御枉駕は全く)遺水の光榮(守が意匠をこらした、庭の遺水の風致が思召に協つたのであらう)と、恐縮して有難がつた。

小君には、晝頃から、かういふ體にして行く積りだと(手筈を)おつしやつて、お約束になつて置かれた。源氏は、小君を始終お側に引き附けて、手なつけてお置きになつてゐる事だから、今晩も先づ、第一に小君をお召し寄せになつた。女(空蟬)もさう言ふ(今晩おいでになる)事のお便りがあつたのについて、(それ程迄にいろ〳〵と)お計畫になつたであらう所(お深切)の程度は、(決して)淺いものと思つてしまふ譯にはゆかないけれども、さうかと言つて、うち解けてみすぼらしい樣子をお見せ申上げるのも、詮無い事で、夢の如く消え去つた先夜の痛苦を、又(新たに)附け加へるだけの事であらうと、(さまざまに)思ひ亂れて、やはり、(何うしても)かうして居て、源氏のおいでをお待ち受ける事は恥かしいので、小君が出て往つた間に、「此所は、大層お客樣の御座所に近いから、都合が惡い(甚だ困る)。氣分が惡いので、そつと(身體を)叩かせたり何かする爲に、もつと距里を離れてな」。(即ち、遠く離れた所に居たい)と言つて、渡殿に(かねて居る所の)中將といふ(先夜の)侍女の部屋の、(引込んだ)隱れ場所へ移つて行つた。

俄にまかで給ふまねして、道の程よりおはしましたり。

紀伊守驚きて、遣水の面目と畏まり歎ぶ。小君には晝より、「かくなむ思ひ寄れる」と宣ひ契れり。且暮まつはし馴らし給ひければ、今宵も先づ召し出でたり。女もさる御消息ありけるに、思したばかりつらむ程は、淺くしも思ひなされねど、さりとてうち解け人げなき有樣を見え奉りても、あぢきなく、夢のやうにて過ぎにし歎きを、またや加へむと思ひ亂れて、なほさて待ちつけ聞えさせむ事のまばゆければ、小君が出でて往ぬる程に、空「いとけ近ければ、かたはら痛し。惱ましければ、忍びてうちたゝかせなどもせむに、ほど離れてを」とて、渡殿に中將といひしが局したる隱れに移ろひぬ。

さる心して、人とく靜めて、御消息あれど、小君え尋ねあはず、よろづの所もとめ歩きて、渡殿にわけ入りて、辛うじて辿り來たり。いとあさましく辛しと思ひ

源氏は、さういふ積りで、(即ち、忍びで空蟬の所へおいでにならうとして)お供の人達を早く寢させて(小君をして其方へ)案内をさせられたが、小君は、(姉は何處へか隱れてしまつたので)えう探し當てない。彼方此方と、方々尋ね歩いて、渡殿に入り込んで、漸くの事で探し當てて來た。小君は、實に呆れ返つた、恨めしい仕打だと思つて、「(源氏君は)何んなに頼みがひの無い(使だ)と思召す事でせう」と泣き出しさうにしていふので「其方はまあ、こんな以ての外の事に氣を揉むのか、年端もゆかぬ者が、かういふ事(男女間の文など)の取次するのは、非常に忌み嫌ふべき(慎まなければならない)事だのに」とおどし附けて、「姉は氣分が惡いので、侍女達を傍に置いて、(體の痛む所を)押へさせたりして(居ります)とお申上げなさい。變だと皆が(其方の擧動を)思ふでせうよ」。といひ切つて、(併し)心の内では、本當に、こんなに(受領の妻などといふ卑い)階級にきまつてしまつた身の境遇で無くて、亡くなつた親の俤の(財産威光なども)、多

少殘つて居る舊の里邸に住んだまゝで、偶にでも(源氏のおいでを)お待ち申上げるのであつたら、趣きもあらうものを、無理に(源氏のお厚情を)分らぬ風をして無視するのも、源氏は、どんなにか身の程を知らぬ、(無禮な女と)思召すであらうと、(氣強く言ひ放つた我が)心ながらも、胸が痛んで、流石に(又いろ〳〵と思ひ惱んで煩悶して居る。何うしたつてかうしたつて、今は、どうにもならない前世の定めであつたのだから、情無しのいけない女になつて、これつ切りにしてしまはうと、斷念し果てた。

源氏君は、小君が何ういふ風に計らひなすであらうと、まだ幼稚であるのを氣がかりに(思つて)、待ちながら臥つておいでになつてる所へ、小君が駄目である旨を申上げたので、呆れ果てた、世に珍らしい心強さを、(源氏は、その手嚴しい拒絶に)「わが身も非常に極りが惡くなつた」とて、誠にお氣の毒なお樣子である。一寸の間、何にも仰しやらない。(そして)ひどく嘆息されて、(眞に)辛いと思召した。

ひて、「小いかにかひなしと思さむ」と泣きぬばかりいへば、「空かくけしからぬ心ばへは使ふものか。幼き人のかゝる事いひ傳ふるは、いみじく忌むなるものを」といひ嚇して、「空心地惱ましければ、人々避けず、おさへさせてなむと聞えさせよ。怪し(と)誰も誰も思ふらむ」といひ放ちて、心の内には、いとかくしな定まりぬる身のおぼえならで、過ぎにし親の御けはひとまれる故郷ながら、たまさかにも待ちつけ奉らば、をかしうもやあらまし。強ひて思ひ知らぬ顔に見消つも、いかに程知らぬ樣に思すらむと、心ながらも胸痛く、流石に思ひ亂る。とてもかくても、今はいふかひなき宿世なりければ、無心(むじん)に心づきなくてやみなむと思ひ果てたり。

君はいかにたばかりなさむと、まだ幼きを後めたく待ち臥し給へるに、ふようなる由を聞ゆれば、あさましく珍らかなりける心の程を、「身もいと恥かしわくさせて)歩いて居るのを、人が不審に思ふだらうと、(空蟬は)困つて居た。

例の如く、お供の人達はぐつすり寢込んでしまつて居るのに、源氏お一方は何となく、殺風景な感じで、さまざまお思ひ續けになつて居られるが、他(ほか)の人とは比べものにならぬ程の、空蟬の心(しん)體(てい)が、相變らずゆるがず、消えずに突き通して居るのも恨めしく、かういふ意氣がある女だからこそ、(却つて又)心を引きつけられるのであると、一方には(そんな風に)思召すものの、あきれ返る程つれない仕打だから、えゝ、もうどうでもいゝわ。とお思ひになつても、(やはり又)さうお思ひ切りになる事は出來さうも無くて、「源その姉の隱れて居る所へでも宜いから連れて行け」と仰しやると、「小君ひどくむさくるしく、障子など締め切つて人(侍女達)が、大勢居りますから、恐れ多いやうで、(即ち、お供する譯には參らぬ)」と申上げた。小君は、お氣の毒だと思つて居る。「源よし。(せめて)吾子(そち)だけでも、予(わたし)を捨ててくれるなよ」と仰し

源「帚木の心も知らで薗原の道にあやなく惑ひぬるかな」

歌意。「おん身の心を能く知らないで、其所へ慕ひ寄つて行く道程に、つまらなく迷つた事であるよ」の意。(空蟬を帚木に譬へた。帚木は遠方からは見えるが、近寄ると見えなくなつてしまふので、尋ねて來て迷つてしまつたと詠まれた。)(本卷一八三頁解釋及び四一八頁評說參照)

(斷然拒絕はしたものの)女(空蟬)も流石に寢つかれなかつた。「空數ならぬ伏屋におふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帚木」

歌意。「物の數にも入らぬ受領の妻といふ名の辛(つら)さに、生きて居る空も無いので、姿を消してしまひました。此の紀伊守の繼母は」。の意。(伏屋をわが位置の卑いのに、はゝきぎを我が身に譬へて詠んだ。)

と申上げた(即ち、空蟬も流石にお歌に對して返歌した)。

小君は、源氏がお氣の毒でたまらないので、ねぶたい氣も起らないで、(この歌の贈答のお使にあちこちと)往復して、(氣をわく

くこそなりぬれ」と、いといとほしき御氣色なり。とばかりものも宣はず、いたくうめきて、うしとおぼしたり。

「源帚木の心を知らで薗原の道にあやなく惑ひぬるかな。

聞えむかたこそなけれ」と宣へば、女も流石にまどろまれざりけり。

「數ならぬ伏屋に生ふる名のうさにあるにもあらず消ゆる帚木」

と聞えたり。

やつて、お側にお寢かしになつた。お若くて懷かしい源氏のお樣子を、小君は嬉しくて、(こんなに可愛がつて頂くのを)結構な事だと思つてゐるので、源氏は素氣ない人(空蟬)よりは、却つて(この弟の方が)可愛いゝと、思召されるとやら。(いふ事である)

【解釋】 **殿にかへり給ひても。** この語は、一寸聞くと、二條院のやうに聞えるが、左大臣邸の事である。それは、同邸へ退出の夜、左大臣にも知らせず、微行で、方違に中川へお出でになつて、その翌早朝、同邸へお歸りになつたからである。

もてつけてもありつる。 「取りなして居た」と解す。「もてつく」は〔言〕「持付」「取り成す」「取り繕ふ」「もてなす」「修飾」。

のたまひ見む。 「申し聞かせて見ませう」の意。即ち「仰せを先方へ傳達する」のである。「のる」は、尊貴の方の語を、第三者に言ふ語で、即ち、下に對する一種の關係敬語である。

あそん。 即ち、八姓の第二等「あそみ」の音便。對稱代名詞、やゝ親しみをもつ輕い敬稱。〔言〕「吾兄臣の略、親しみて呼ぶ語、姓の名、第二等に居る。」

小君いといとほしさにねぶたくもあらで、惑ひ歩くを人怪しと見るらむとわび給ふ。例の人人はいぎたなきに、ひと所すずろにすさまじく思し續けらるれど、人に似ぬ心ざまの、なほ消えず立ちのぼれりけるもねたく、かゝるにつけてこそ、心もとまれと、且は思しながら、目ざましくつらければ、さばれと思せども、さも思し果つまじく、「源隱れたらむ所にだに、猶率て行け」と宣へど、「小いとむつかしげにさ

心ゆかぬ。 「心くゆ」は、愉快の意だから、之と反對で、「不愉快」の意である。

こまやかにをかしとは無けれど。 「こまやか」は、濃いといふ方にも用ふるから、こゝは「深みがあつて、綺麗だといふではないが」と解す。(本卷四一四頁評説參照)

心やましく。 「心なやましく」であるから、「嫌な心持がして」と解す。(四一五頁評説參照)

さばな參りたまひそ。 「さば」は「さあらば」の略、「さは」と清んで讀めば、「さては」の略である。先づ、濁る方に從つて置かう。

つゐせう。 「御機嫌を取つて、近づかうとする事」。〔言〕人の後に服き從ふこと、媚びへつらふこと、おもねること。

ぬる夜なければ。 引歌。〔細〕に「戀しさを何につけてか慰めむ夢にも見えずぬる夜なければ」かうあるが、どうも、確かな出所は不明らしい。が、こゝは引歌がなければわからぬ。

いづら。 「いづれ」「何處」と同じ意である。「何處に返事は持參してゐるぞ」といふ言語の略である。

あこ。 「親しみ呼ぶことば」「吾子」又「あご」「吾兄」「吾君」など、

し籠められて、人許多侍るめれば、かしこげに」と聞ゆ。いとほしと思へり。「よし、吾子だにな捨てそ」と宣ひて、御傍に臥せ給へり。若く懐しき御有様を、嬉しくめでたしと思ひたれば、つれなき人よりは、なか〳〵あはれに思さるとぞ。

「わが」のが略。英語の My dear. の如し。

あなづる。「輕蔑をする」と解してもよいが、「冷遇」と解す。つまり侮る意である。

いみじかりけることかな。「ひどい事であつたなあ」の意。即ち、小君が源氏の言を信じて、姉が源氏に對する仕打の冷淡さを、「ひどい事をしたものだなあ」と思つたといふ意味である。

みくしげどの。は「御匣殿」と書く。匣は、櫛の箱の意であるけれども、實は呉服所、即ち裁縫所の事をさすのである。（本卷四一六頁評説參照）

心より外に。「不用意」と解して置いたが、詳しくいはば、小君は、お手紙を落さぬ積りであり、人に見られないやうにと考へて居ても、まだ子どもであるから、自分の心持に相違して、過つて他に散らすやうな事といふ意味である。

めでたき事。「結構な事」の意。〔言〕「愛甚しの義」（一）「愛づべくあり」「愛くし」「賞すべし」（二）「盛に麗はし」「殊に好し」「結構なり」「偉麗」（三）「吉き兆なり」「悦ばし」「祝ふべし」「ことほぐべし」「可慶」「可賀」「慶賀すべし」。

げになべてにやは。なる程かねての評判の如く、尋常普通のお容態であらうか。否、決してさうでは無い。（非常に優れたお立派な方である）の意である。

思し惑る云々。記憶を忘らない意で、即ち、「忘れぬ」のである。

便なきふるまひやあらはれん。人の爲もいとほしくと思し煩ふ。〔湖〕にはかくある。〔異本〕には、「便無きふるまひやあらはれんと人の爲もいとほしく思さる」とある。これだと「便無きふるまひやあらはれむ」迄が源氏の心で「人の爲もいとほしく思さる」は、作者が草紙地から言つて居るのになり、〔湖〕の方だと、「いとほしく」迄源氏の心といふ事になる。或は、前の方がよいかも知れぬが、先づ〔湖〕の方に從つて置く。

さるべき方の忌。方角を忌むべき機會、即ち、方違せねばならぬといふ口實を作るに、然るべきをりといふ事である。

めいぼく。「光榮の意」。〔言〕「面目の讀辯」「世の人に合はす面」「面皮」「人の世に立ちて譽を保つこと」「面目を施す」「譽を得」。

ならし給ふ。「手なづけてお置きになる」の意。「ならす」は他動、「なる」は自動である。「ならす」は「馴るゝやうになす」。

消息。「案内」である。「先づ豫め知らせる」意。（桐壺一七八頁解釋參照）

たばかり。「た」は接頭語であるが、語に力を添へるから、感じを強くする。「謀り」の意であるが、多少他を欺く意を含む。

人げ無き。「人數にも入らぬ樣な」であるが、「みすぼらしい」、又は「見る影も無い樣な」といふ樣に解すべきである。

うちたゝかせ。身體を揉みさすり、打ち叩かせなどする爲である。平安朝當時も、既に按摩術は行はれて、譽術

の一部に算へられて居た。是は、最初は支那から傳來し、漸次、我が國で改良進歩したものらしい。但、こゝのは、單に侍女にさせるのである。（本卷四一七頁評說參照）

離れてを。 このをは、感動のをで、ねとか、なとかいふ樣な意である。「を」の下に「あらむ」などの意を含む。

かくれに移ろひぬ。 「かくれ」は「引き込んだ所」で、即ち「隱れの場所」である。（本卷四一七頁評說參照）

よろづの所。 「彼處此所と方々」と解す。「よろづ」は、〔言〕「萬」「すべて」「ことごとく」。

渡殿。 これは、もと往復の爲に設けた廊であるが、往々幅を廣く作りて、其の半を通路に當て、餘を適宜にしきつて、簾などをかけて、女房達の部屋に用ひられる場合が多いのである。（桐壺一八頁解釋參照）

けしからぬ。 意味は、今俗に用ふる語の意と同樣である。もと「異しかり」「怪しかる」などといつた、異樣の意であるのが、打ち消しに「怪しくあらぬ」、約「けしからぬ」と用ひて、やはり、惡しき方の寧ろ强意に用ふる事になつて居るのである。

忌むなるものを。 「嫌がる事であるのに」の意。又「憤まなければならない」とやうの意である。

おぼえ。 「思はれ」の意。「記憶」轉じて「信望」等と解するが、こゝは先づ「境遇」と解す。（桐壺一〇頁解釋參照）

けはひ。 「おもかげ」と解す。「氣色」「樣子」「氣配」等を當てるが普通であるが、こゝには、それでは十分に當らぬから、先づ、かう解して置く。

むじん。 は「無心」と書いて、大抵文字の如く解してよからうが、「情無し」として置く。

ふよう。 是も「不用」といふ文字で、大概意は通じるが「駄目」の俗語が、猶よく當つて居る。

とばかり。 は「一寸の間」の意。

まどひ歩く。 「まどひ」の解釋は無くても可からうが、先づ「氣をわく〳〵させて」を挿入して置く。

いきたなし。 「ぐつすり寢込んでしまつて」と解したが、俗語の「寢ぼうして」と簡單に解しても可いのである。

心ざま。 「心體」と辭書の如く譯して置いたが、單に「心」だけでも解らう。又「意氣地」とやうにも解してあるが、それでも當らぬ事はあるまい。

さばれとおぼせど。 〔異本〕にはかくあり。〔湖〕〔德河內〕ともに「ども」ともがある。無き方然るべし。

よし。 は不滿足ながら、强ひて許容し又は受諾する意。俗の「まゝよ」としても可いが、今俗にも同じ意味に用ひて、「よし。かまはんで置かう」などと言つてゐるから、口譯には本文通りにして置いた。

とぞ。 この下に、「承る」とか「言ふ事である」などの語を省略したのである。古文には往々このことばを用ひてあるが、誠に文章の結尾に使ふに、都合の善いことばである。

この「とぞ」は、例の作者が、人から聞いた事の樣に態と書いたので、桐壺卷に「高麗人のめで聞えてつけ奉りけるとぞ、言ひ傳へたるとなむ」と記した心持と同樣である。

【評說】 ○中納言の子は得させてむや。　源氏のことばである。〔德河內〕には、權中納言とある、或は權かもしれぬが、ただ中納言でもよい。よし、權であつても、かういふ風に略していふ事は、枕草紙などにも往々あつて、權大納言をも、いつも權は中さぬ例だから、よし權中納言でも、權はつけないでよいと思ふ。この空蟬の亡父の官、最初には衞門督とあり、こゝには中納言とある。これは、〔花〕に

「權中納言兼右衛門督たりし故也」とあるに從ふべきあでらう。下輩に對つての、氣の置けぬ座談には、往々其等の點には、大した注意も拂はぬ所から、斯ういふ風に、源氏は、ふと口から出るまゝの名を以て、お話になつた狀態であらう。

源氏が紀伊守を呼ぶに、最初は「眞人」と言ひ、後には「朝臣」といはれて居る。是も、大抵ほぼ前の例の如く、氣詰りな對話で無い場合には、今も「きみ」といつたり、「おまへ」といつたりして、話すが如きものであらう。

○もて離れてうと〳〵しく侍れば、世の譬にてむつれ侍らずと申す。と紀伊守が申したのは、當時、繼母子は疎々しきものだとか、又は、餘り親密にしてはならぬとか言ふ、譬ことばでもあつたものであらう。

〔河海〕に白氏文集を引いて、繼母が繼子に蜂を拂はせて、繼母が其の夫に、繼子が吾を犯さうとして迫つたと讒したといふ、支那の故事の引證は、あまり適當で無い樣であるといふ說は、いかにもさう思はるゝ。

○こまやかにをかしとは無けれど。「こまやかに小柄で、點の打ち所の無い程美しいといふ子では無いが」とか、「品がよく美しいといふ譯では無いが」など、種々に解してもあるが、何うかと思ふ。又「細美」の意で、妻を「細君」と書くも、この意だといふ說もあるやうだが、細美といふ熟字も、何だか妙でないやうに思はれる。併し、自分の解釋も、まだ言ひ盡せぬ樣な心持はするが、先づ、暫くかうして置く。

○源氏の、「吾子は知らじな」以降、小君に言はれた事は、勿論作り事で、小君に同情を持たせて、空蟬にひそかに會ふ手引をさせる爲である。源氏の空蟬に對する懸想は、隨分、白熱的になつて、敢て、この小童迄を欺かれる所など、殆ど、本心を失つて居られる狀態である。總じて、若き男子が戀愛問題に熱中した際には、斯くの如き態度に迄も、否より以上にも至る事を考へると、女子は、餘程之を打ち消すだけの冷靜な强さを持たなければ、可なり固く築いた防禦線も、切り崩される道理であるのに、此のなよ竹は、なか〳〵ねばり强いものでは無いか。

源氏が、空蟬に熱中されるあまりに、その弟の小君にちやほやして、殆ど、親の樣な深切なお世話をなされる邊り、誠に何によらず、野心を抱く人の、その目的に對つて心を盡し力を入れる狀態は、實に斯ういふ事があるものだが、かゝる事にて、一時源氏に愛された小君は、他の忠實な家人達と違つて、源氏が須磨にお漂ひの時は、體よく離れて行かなかつた所に、細かい偶意が含まれて居るのである。自分は源氏と小君との關係云々の事に就きての、廣道說はとらぬ。猶申したい事もあるが例の態と省く。

○みくしげどの。殿は、宮中の貞觀殿にあつて、天皇の御服を製るので、その意味は、夫人はもと、夫の爲に衣服等の事も取りしたゝめるといふ掟から來て、こゝに置かれたものだとの事である。そして、

當時は宮中のみならず、攝關大臣は勿論、公卿の家庭に迄も、吳服所即ち裁縫所の事は、御匣殿と稱する樣になつたのは、やはり次第に潛上して、さういふ事になつたのであらう。この外、天皇又は宮中ならでは使はれぬ筈、用ひられぬ筈の事柄、詞等も、臣下が潛上して、平氣に使用するやうになつた事が段々ある。

○「されど此の子もいと幼し」。　これ以下、「をかしきさまを見え奉りても、何にかはなるべきと思ひ返すなりけり」の一段は、誠に、空蟬の冷靜な理智の閃きが鮮かに見えて、うるはしい所である。どの途、自分は人妻であり、其の他、源氏に比肩すべき何物も無い。して見れば、到底、その寵遇を受ける事は出來ない。かう考へて來ると、却つて、情趣知り顏な應答などをして、源氏の心を引き付けるやうな態度は、慎むべきである。沒趣味のいひがひなき女と呆れられようとも、是は分別をきめて、遠ざかるべきであると考へた。前述の如く、今と違つて、趣味風流を解せぬ者は、人間らしい人間として取扱はれなかつた當時であるから、尙更、此の空蟬の決心は、甚だ强いものである。併しながら、空蟬は、源氏がいよ〳〵諦められたなと安心すると、又、何とも言へない物足りなさ、うら寂しさを感ずる邊りの心の矛盾も、誠に、眞に迫つて居る。いつもながら、人情の機微に觸るゝ細かい筆致を、感心させられる次第である。と同時に、前にも申したやうに、此の空蟬の自守的行動も、武門時代の如き節義貞操が心根にたつる所の、第一主柱ではなくて、品位格式を傷けまいとする所の、一部分の貞操をも考へたといふ位の程度であつた事を思はしめらるゝのである。

○うちたゝかせ。　解釋の所に申した樣に、按摩術は、可なり古くから行はれた樣である。明治時代、宮中にても、玉體の爲に御格子後(御寢後)、其の術に堪能なる者が選ばれて、奉仕することになつて居て、侍醫局から出仕參進するので、其等の人の後宮退下は、遲い時は、夜半を過ぐる事もあつた樣に記憶する。斯ういふ御役を蒙る人は、皆六十歳位若くは其以上の老人であつた。

○かくれに移ろひぬ。　〔玉〕「かくれとは、隱れたる所をいふか。又思ふに『つぼねしたる隱れ』にて隱れん爲にといふ意なるを、後の人『に』の文字重なれるを、いかがと思ひて、上なるをばさかしらに除きたるか」とある。〔釋〕「初の說よろし、後の說はひがごとなり。『かくれ』は體言にてかくれ所といふ意なり」とある。自分も此の說に共鳴する。「かくれ所」たることは勿論である。

○心の內には。　これから以下、「無心に心づきなくてやみなむと思ひ果てたり」の邊り、實に、空蟬の健氣な覺悟が、能く寫し出されて居る。

空蟬は考へた。何と思つて見た所で、もう自分は受領の妻である。今更、いくら世人が隨喜渴仰の的となつて在す源氏君が、望外の愛顧と深切とを盡されたとて、どうなるものぞ。それが、若しも昔の處女の儘で、とまれ、寂れたりとも父中納言が住んだ館で、まだ餘光の殘つて居り、品位も多少たもたれて居る場所にて、偶にでも君のお出でをお待ち受けする事が出來るのならば、どんなに、情趣も深い事

であらう。と、幾度考へて見た所で、それは全く、死兒の年齢を算へると同じものだ。あゝ思ふまい、考へまい、是つ切りでお別れしよう。そして、源氏が、情無しの沒趣味の分らずやだと、爪彈きをなさらうとも、致しかたが無いと、斷然決心した心持は、實に、買つて遣らなければならない。しば〳〵申す通り、此の頃沒趣味の人は、全く除外された時代であるから、空蟬が、かういふ風に思ひ切る事は、非常な煩悶であらねばならぬ。丁度、武門時代、敵に後を見せた時の様な狀態で、即ち「武士がたゝぬ」といふが如き立場に置かれるからである。

○あさましく珍らかなる心の程を。　〔釋〕「このを文字の下に必ず脱文あるべし。この儘にては聞え難し。其の故は『身もいと恥かしくこそなりぬれ』とあるは、源氏の宣ふ言なるを、『珍らかなりける心の程を』とあるは、源氏の思ひ給ふ心なれば、其の間に語なくてはとゝのひ難し。猶考ふべきなり」とある。爾後、この説に段々贊成の説がある。なる程、一寸はつきりせぬ様だが、併し、斯ういふ書き方は、こゝ許りでは無い。外にもいくらもあるから、先づ、口譯のやうに解すれば、強ちわからぬといふ程でもあるまいと思ふ。

○「信濃國伊那郡薗原」は、今小野川の谷にて、古驛路にあたり、布施屋を置きて、行人を留宿せし所とす云々」〔大日本地名辭書〕。昔の東山道の要所であつたらしい。即ち、美濃から近江へ越える、信濃の御坂路である。近江・美濃・信濃の三國境を接して居り、その境界は、近世迄もなか〳〵やゝこしいものであつたといふ事である。

布施屋は、旅舍の設けが殆ど無かつた頃は、かういふ施し宿を、要所に置いて、旅人の便を謀らしめられたらしいが、今は、「伏屋」と書いて居る。「伏屋に生ふる」云々の歌も、勿論、布施屋の意味ではなくて、「伏屋」即ち、いぶせき小屋の意に取つて居るのである。

帚木は「薄」だといふ説もあるが、卷名解釋の所に申した様に、現に、自分が曾祖父の時代迄は、檜木やうの、千年以上を經た二本の木が存在してあつたといふから、先づ、是なりとして置いて、然るべきであらう。

帚木の傳説が、神秘的、怪奇的であつたから、昔は、薗原なる名所は、帚木の名と共に、なか〳〵國中に聞え渡つて、歌枕などにもて囃されたものである。

「薗原」を「その」といふ名にかけて「其所」といつたといふ程、判然したことでは無いが、「心を知らでそのはらの道に」といふ邊りを吟じて居ると、何と無く、そこへ行く道程といふ様な感じの浮んで來る所に、和歌の調子なるものが存して居るのである。故に、解釋には、さうはつきり説いては、所謂、こじつけにならうからいけないが、一寸、そんな氣持を含んで見ると、尙更懷しみが生ずる譯ではある。このが、和歌の言外に溢れる意味の深い所で、全く、デリケートだとでも申したいのである。

○かゝるにつけてこそ心もとまれ云々。是も、實に男子の氣持を能く述べて居る。こんな風に、

容易に靡かぬ婦人、それが却つて又、斯の道に贅澤な男子にとつては、尙更、極めて興趣があるものらしい。一方には、思ふ樣にならぬとて、焦々しながら、他方には、反對に興味を煽られる。且は、あの位の婦人に負けて、指を喰へて引つ込めるものかといふ負けぬ氣もある。從つて、段々意地も張つて來る。扨こそ、世人の思惑、自己の體裁も考へなくなる程、無茶苦茶に突進する樣にもなるのであるが、併し、何と言つても、かゝる場合に、婦人がなほ確乎して居て、能く冷靜を失はなければ、遂に、男子も諦めを餘儀なくするのである。空蟬は、能く冷靜を保ち得て、源氏を退却せしめた。すべて、濃厚なる戀愛は熱病と同樣だと、或醫學博士が說いたといふが、全くさうであらう。この下熱劑は、なか〳〵むつかしいけれども、熱ならば、時が立てば自然冷める事もあるし、又、投藥宜しきを得れば、早くも冷めよう。要するに、最も情性に富める女性が、その情を、常に正しき軌道に箝めて動搖せぬ樣の修養と、注意とが大切であらう。

○帚木卷は、雨夜の品定に於いて、作者の女性觀を遺憾なく吐露して、全篇中に活動する登場人物を、序幕的に記し、作者の理想を縷述しながら、後段に、中川の宿の方違を出して、論議的に充血した肩凝を、しらず〳〵、いつの間にか、すらりと解きほごしてしまつた手際は、實に、鮮かなものである。故に、觀客は全く實際的の出來事に接したかの樣な心持で、次へ〳〵と目を移して行く事になるのである。それらの配置構造は、即ち作者のつや消し主義、暈し手段であつて、例の、用意の深さと申すべきであらう。

品定の噂に上つた、頭中將の愛人が、第四卷の夕顏卷に、現實に登場して、そして、その花の露の樣に、はかなく消えて、一寸一段落がつき、露の形見の撫子は玉鬘として、大分主要人物となり、物語の殆ど末段頃迄繼續して居る。

夕顏の夢に現れた生靈の主は、なほ引き續いて實現し、澪標卷に終焉される事になる。當時の、しかも長い古物語に、是程能く首尾貫徹して、且、他をして飽かしめぬものは、やはり、殆ど無いのである。なほ、諸氏が種々の說も、この品定に對しては、殊に隨分澤山あるが、こゝには省略する事とした。

空蟬

寝られ給はぬまゝに、「源我はかく人に憎まれてもならはぬを、今宵なむ始めて憂しと世を思ひ知りぬれば、恥かしうて(え)ながらふまじくこそ思ひなりぬれ」など宣へば、涙をさへこぼして臥したり。いとらうたしと思す。手さぐりの細く小さき程、髪のいと長からざりしけはひの似通ひたるも、思ひなしにやあはれなり。強ちにかゝづらひたどり寄らむも人わろかるべく、まめやかに目ざましと思し明かしつゝ、例のやうにも宣ひまつはさず、夜深う出で給へば、この子はいとほしくさうぐしと思ふ。

女もなみ〳〵ならず、かたはらいたしと思ふに、御消息も絶えてなし。思し懲りにけ(り)と思ふにも、やがてつれなくて止み給ひなましかば憂からまし。強ひていとほしき御ふるまひの

【口譯】(前卷、源氏が紀伊守邸にお宿泊の所のつゞきである。源氏は昂奮して)お眠りなられないので、予は、こんなに人に憎まれた覺えもないのに、今宵始めて、(實に)辛いものだと、世の中を痛切に感じたから、極りが惡くて、えう生きて居られない樣な心持になつた」などとおつしやるので、(小君は、源氏をお氣の毒に思つて)涙までこぼして臥つて居た。(源氏は、小君が同情する樣子を)可愛いと思召す。

手觸りの華侈で、小柄な工合や、髪があまり長くなかつた樣子が、(此の小童の弟と、姉と)相似て居るのも、兄弟と思ふせゐか、(懷かしく)しみじみ感ぜられる。無理に(あの樣な婦人などに)かゝりあつて、尋ねもとめ近寄らう事も、體裁が惡からうし(と(不愉快に)お思ひになりながら、夜をお明しになつて、(小君をも)いつものやうに、なつつこくお話しになつたり、お側へお引きつけになつたりもならず、未明に中川邸をお出かけになるので、小君は、(源氏を)非常にお氣の毒に思ひ、(取り殘された身を)寂しいと感じた。

女(空蟬)も、(源氏を拒絶した事を)並一通でなく、お氣の毒だと思つて居るのに、(源氏からは)手紙もさつぱり來ない。(あれで)懲々なされたのであらうと思ふにつけても、(あのまゝで)直に(諦らめて)知らん顏をして、絶えておしまひになつたら辛からう。(かといつて)強ちに迷惑なお仕打が續くのも、(尙更)嫌な事であらう。程よい所で、終局にしてしまはうとは思ふものの、(どうも)心にかゝつて(ふだんのやうでなく)、茫然と物思ひがちである。

(源氏の)君は、(空蟬の仕向を)いま〳〵しくは思召しながら、

絶えざらむもうたてあるべし。よき程に(て)かくてとぢめてむと思ふものから、ただならず、ながめがちなり。

君は心づきなしとは思しながら、かくてはえ止むまじう御心にかゝり、人わろく思ほしわびて、小君に「いと辛うもうれたくもおぼゆるに、強ひて思ひかへせど、心にしも從はず苦しきを、さりぬべき折を見て、對面すべくたばかれ」と宣ひ渡れば、煩はしけれど、かゝる方にても、宣ひまつはすは、嬉しうおぼえけり。幼き心地に、いかならむ折にかと待ち渡るに、紀伊守國に下りなどして、女どちのどやかなる(頃)、夕闇の、道たど〳〵しげなる紛れに、我が車にて率て奉る。この子も幼きを、いかならむと思せど、さのみもえ思しのどむまじかりければ、さりげなき姿にて、門などささぬさきにと急ぎおはす。人見ぬ方(より)(に車)引き入れて、おろし奉る。童なれば宿直人(とのゐびと)なども、殊に見入れども、(やはり)さうばかりも、暢氣(のんき)にゆつくりとお考へになつてる事は、出來さうもなかつたから、(即ち、白熱した焦燥を消し止めて、冷靜にはなり難い)、さうとはわからぬやうなお姿(源氏君とは見えない樣な、目立たぬ粗末な服裝(なり))をして、(同邸で、まだ)門などを閉鎖(とざ)してしまはない間(あひだ)にと、大急ぎでおいでになる。(小君は)人目につかない方へ車を引き入れて、(源氏を)おろし申上げる。子どもの事であるから、番人なども、特に目も注(つ)けないし、御機嫌取に寄つて來て世話もしないので、(却つて)氣安い。(南面の家の)東の妻戸の所に、(源氏を)お立たせ申して置いて、我(小君)は、南の隅の間から、格子を(荒々しく)叩いて、(開(ひら)けよ。などと態と)騒がしく大聲で呼び立てて、(中へ)入(はい)つた。侍女達は、「(開けつ放して置いては)外より内が丸見えです」といふのである。(小君は、此所から源氏をお入れしようと思ふので)、「なぜ、こんなに暑いのに、格子はお下(おろ)しになつたの」とたづねたら、「侍女畫から、西の御方(空蟬の繼女(まゝむすめ))がお見えにな

このまゝでは、よう止めてしまはれさうも無く、お氣にかゝつて、體裁の悪い程お煩悶になり、小君に「源非常に恨めしくも、歎かはしくも思はれるので、無理に(あきらめようと)思ひ直しても、心が心のまゝにならず、苦しいから、然るべき機會を見つけて、(もう一度)會はれるやうに取り計らへ」と、始終おつしやるので、(小君は)迷惑ではあるけれども、かう言ふ方面の事でも、(やはり、源氏から睦しく)お言葉をかけられ、お側へお近づけになつて下さる事は、嬉しいと思つた。

(小君は)子ども心に(一途に)、何うした機會にか、(源氏を都合よく御案内申上げたいものだ)と待つて居るうちに、紀伊守(きのかみ)が、任國へ下向したりなどして、女同志暢(のん)びりとうち寛(くつろ)いで居る頃、夕闇の道がはつきりと見えない暗さに紛れて、(源氏を)自分の車に(そつと)お乘せして、(中川邸へ)お連れ申上げた。(本卷四四四頁解釋引歌參照)。(源氏は、流石に)この子も子どもの事であるから、(うまく行くか知らむ)何うであらうと、懸念は遊ばすけ

れ追従せず心やすし。東の妻戸に立て奉りて、我は南の隅の間より格子叩きのゝしりて入りぬ。御達「あらはなり」といふなり。「小なぞかう暑きに此の格子は下されたる」と問へば、「晝より西の御方の渡らせ給ひて、碁打たせ給ふ」といふ。さて對ひ居たらむを見ばやと思ひてやをら歩み出でて、簾のはざまに入り給ひぬ。この入りつる格子はまだささねば、隙見ゆるによりて、西ざまに見通し給へば、このきはに立てたる屏風も、端の方押し疊まれたるに、まぎるべき几帳なども、暑ければにや(みな)打ちかけて、いとよく見入れらる。

火近うともしたり。母屋の中柱にそばめる人や、我が心がくる(人ならむ)と、先づ目とどめ給へば、濃き綾の單襲なめり。何にかあらむ上に着て、頭つき細やかに、小さき人のものげなき姿ぞしたる。顔など(も)さし對ひたらむ人などにも態と見ゆまじうもてなしたり。手つき瘦

つて、(空蟬と)碁を打つておいでになります」といふ。(源氏は)さうして對ひ合つて居る所を見たいものだと思つて、そつと、(其所から)歩き出して、簾の間へお入りになつた。小君が入つた格子は、まだ(其のまゝで)しめずにあるので、其の隙間から、西の方をお見渡しになると、(源氏は、東南の方から西に向いて居られる)、この格子の傍に(接近けて立ててあつた屏風も、端の方が疊まれてあるし、見通しの邪魔になる筈の几帳の垂布なども、みんなまくし揚げて、横木に掛けてあるので、(奥迄)大層能く見込む事が出來る。

燈火は、兩女の側近くに點してある。母屋の中柱のところに(一寸寄りかゝる樣にして)、少し横向に(源氏の方から見たさまである)すわつてる婦人が、我(源氏)が懸想して居る人らしいと、(直に)先づ、目を注けて御覽になると、濃き色の單襲であらう。(夜目では)何だか能く分らぬが、上に被つて、頭の恰好も細そりとした、小柄の人で、目立たない姿をして居る。顔や何かも

手つきが大層痩せて居て、出來るだけ(單の袖に引つ込めて)隠してるやうである。もう一人の女は、東向に座つて居るので、(源氏の方からは)、(判然と)丸見えである。白い羅の單襲の上に、二藍の小袿らしいものを無造作に被つて、紅の袴の腰紐を結んだ際まで、(襟をきちんと合せてないから)胸が露出に見えてだらしない態度である。(色は)大層白く美しく、まる〳〵と太つて居り、背は高い方の人で、髪の樣子、額の樣子もくつきりとして、目つき口もとにも、大層愛敬があつて、華美な容貌である。髪は非常に多く、ふつさりとして居て長くはないが、その下り具合、肩の邊が實に綺麗で、何處も變な所が無く(即ち無難で)、美しい婦人と見受けられた。なる程、親が類の無い(立派な)女だと思ふであらう(父が平素自慢して居るらしい)と、(源氏は)興がつて御覽になる。

(彼の女の)心持に、もう少し落ち着きを加へたいものだと、一

痩として、いたう引き隠しため寸さう思はれる。氣の利いた所が無いではあるまい。碁を打つり。今一人は東向にて、殘る所てしまつて、駄目を詰めたりなどする折も、敏捷さうに見えて、なく見ゆ。白き羅の單襲、二藍てきはきとしてはしやいで居ると、奥の方の人(空蟬)は、誠に靜の小袿だつものないがしろに かに、(その騒ぎ立てるのを)おさへるやうにして、「お待ちなさ着なして、紅の腰引き結へるき いよ。其處は持でせう。此の方面の劫をな」などと、言ふけれどはまで、胸あらはにばうぞくなも、「軒いや、今度は負けました。隅々の地を(算へよう)。どれどるもてしなり。いと白うをかれ」と(いつて)、指を折つて、「十、二十、三十、四十」などと算へたしげに、つぶ〳〵と肥えて、そぞてる様子は、(あの澤山あるといふ)伊豫の、(道後の溫泉の)湯桁ろかなる人の、頭つき額つきも(の數)もちやんと算へて、知つて居さうに見える。(空蟬に比べのあざやかに、まみ口つきいと て)少し品格が劣つてる。(一方は)譬へやうも無く、(袖で)口(の愛敬づき、花やかなるかたちな 邊り)を隠して、(顔を)判然と見せないが、源氏は目をじつと注り。髪はいと房やかにて、長く いでおいでになると、自然、側面から(横顔が)見える。目(瞼)は少し腫ぼつたい様で、鼻なども鮮明とした所がなく、しよんぼりはあらねど、さがりば、肩の程い として低く(かたちも何となく年寄じみて)、ぱつとした美しい所(みづ〳〵しいうるはしさ)も見えない。算へ立てれば、(寧

と清げに、すべていとねぢけたろ)醜い方に近い容貌を、實に、大層たしなみ裝つて、この(一方る所なく、をかしげなる人と見の器量の)優れて居る女よりは、情趣があらうと、注目されさうえたり。うべこそ親の世に無くな様子をして居る女は、(女は)陽氣で、愛敬があつて、艶美であるのは思ふらめとをかしく見給ふ。 を、一層得意らしく、奥底なく笑つたりしてはしやぐので、(尚心地ぞなほ靜かなるけを添へ 更)ぱつと美しく見えて、これも亦、一種の女として、大層面白いばやと、ふと見ゆる。かどなき 人柄だ。浮々して居るな、とは思召しながら、實法でないお心には、念頭から除外し切られさうもない様であつた。(源氏が、是にはあるまじ。碁打ち果てゝ、 まで)御覽になつただけの女は、(いづれも)うち寛いでる場合なけちさす(わたり)(ほどなど)心疾げに見 く、取り繕ひ、眞面にも對はぬ様な、表面ばかりを見て いらつしえて、きは〳〵しうさうどけば、 やるのだ。こんなに、(無遠慮に)寛いで居る人の様子を、覗いて奥の人はいと靜かにのどめて、 御覽になる様な事は、まだ嘗てなされないのであるから、(女達「待ち給へや。そこは持にこそ が)何の氣つかずに居る所を、殘り無く、すつかり見るのは氣の毒だけれども、(珍らしいので)長く御覽になつていらつしやりあらめ。このわたりの劫をこ たいが、小君が出て來るやうな氣配がするので、そつと(其所を)そ」など言へど。「軒 出て、(もとの所へ)おいでになつた。

は負けにけり。隅の所々いでいで」と、およびをかがめて、「十、二十、三十、四十」など算ふるさま、伊豫の湯桁もたど〳〵しかるまじう見ゆ。少し品おくれたり。たとしへなく口おほひて、さやかにも見せねど、目をしつと着け給へれば、おのづから側目に見ゆ。目少し腫れたる心地して、鼻などもあざやかなる所なうねびれて、匂はしき所も見えず。言ひ立つれば惡きに寄れるかたちを、いといたうもて

（源氏は、もとの様に）渡殿の戸口（の所）へ寄りかゝつて居られる。（小君は、こんな所に長くお待たせして）本當に勿體ないと思つて、「いつも居ない人（軒端荻をさす）が居りまして、（姉の）側へも參られませぬ」と申上げると、「（それでは）今晩も、（このまゝ）歸さうと（いふの）かえ。實につまらない。つらいではないか」とおつしやると、「どう致しまして。（參つて居る者が）彼方へ歸りましたら、都合を致しませう」と申上げた。（小君が）あゝいふ如に、（姉を）納得させる事が出來さうなので、あらう。子どもではあるが、物事の事情や、人の顏色を讀み得るだけの落ち着きがあるのだものと、思召すのであつた。（奥では）圍碁も濟んでしまつたと見えて、衣摺の音がさら〳〵と聞えて、皆が其所を退散する樣子である。（と、侍女達が）「若樣は何處にいらつしやるのでせう。このお格子は閉めてしまひませう」といつて、がたがたさせて居る。「（もう皆）寢靜まつたやうだ。入つて行つて。では、都合をつけなさい」とおつしやる。この子（小君）も、姉

つけて、この勝れる人よりは心あらむと、目とどめつべきさまし。賑はしく愛敬づきをかしげなるを、いよ〳〵誇りかに打ち解けて、笑ひなどそぼるれば、にほひ多く見えて、さるかたにいとをかしき人樣なり。あはつけしとは思しながら、まめならぬ御心は、これもえ思し放つまじかりけり。見給ふ限の人は、うち解けたる世なく、引き繕ひそばめたるうはべをのみこそ見給へ。かくうち解けたる人のお心は到底折れさうで無く、眞實に思はれるから、相談のしかたが無いので、人目の少ない折を見て、（源氏を）お導き申さうと思ふのであつた。

（源氏は、先刻の事は知らぬ顏をして）「紀伊守の妹（軒端荻）は此方に居るか。予に際見させなさい」とおつしやると、「どうしてそんな事が出來ませう。格子（の內側）に几帳が立て添へてござりますもの」と申上げる。さうだ。けれども、（實は既に疾うに際見したのだ）と、可笑しくお思ひになつたが、見たと（いふ事）は知らせまい。氣の毒だからとお思ひになつて、夜の更けるのが、待遠しい（困るといふ樣な）事をおつしやる。（格子は閉つたから、小君は）今度は、妻戸を叩いて（開けさせて）內へ入る。（もう）皆、人々は寢靜まつてしまつた。「この障子口に、私は寢て居よう。風吹き通せよ」。と（獨語を）言つて、薄緣を廣げて寢る。侍女達は、東の廂の間に、大層大勢寢て居るのであらう。（小君の爲に）妻戸を開けた童女も、其方へ入つて寢てしまつたので

の有様、かいまみなどは、まだし給はざりつる事なれば、何心もなうさやかなるはいとほしながら、久しう見給(へ)まほしきに、小君出で來る(こゝち)(音)すれば、やをら出で給ひぬ。

渡殿の戸口に寄り居給へり。いとかたじけなしと思ひて、「小君例ならぬ人侍りて、え近うも寄り侍らず」(と聞ゆれば)「源さて今宵も歸(や)してむと(する)(や)。いとあさましう辛(から)うこそあべけれ」と宣へば、「小などてか。彼方に歸り侍り

(小君は)暫く寢たふりをして、燈火の明(か)るい方へ屏風を廣げて(置いて)、火影の薄暗い所に、そろりと(源氏を)お入れ申上げた。(そこで、源氏は)どうだらうな。ばからしい事でも(起りはせぬか)とお思ひになると、(流石に危ぶまれて)大層氣が引けるけれども、(とにかく、小君の)案内に從つて、母屋の几帳の垂布(たれぬの)をまくり上げて、極(ごく)そろ〳〵とお入りにならうとなされても、皆寢靜まつた夜中の御衣(おんぞ)の(きぬずれの)音は、柔らかなのが、却つて大層はつきりと聞えた。女(空蟬)は、さやうに(近頃消息もとだえた)お忘れになるのを、(先づ安心)嬉しい事とは思ひなして居るものの、妙に夢の様であつた(先夜の)事が、(どうも)念頭から去る折のない頃だから、ぐつすりと安眠する事は出來ないのである。晝は、ぼんやりとしてながめ暮らし、夜は、寢覺勝ちに明(あか)すのであるから、春でない目も、安まる暇がないのに(本卷解釋四五〇頁、引歌參照)、圍碁の相手の女君((軒端荻)は、今晩は此方で(泊(と)めて)戴きます)とて、賑やかに(繼母の空蟬と)話しをしながら、寢てしまつた。

若い人(軒端荻)は、何にも知らずに、よく寢込んだらしい。(空蟬は)かういふ(人の近づく)樣子がして、大層好い薫(かを)が匂ふので、顏をもち上げて見たらば、几帳の單(垂布)を引き上げた隙間に、暗いけれども、(誰か)身を動かして近寄つて來る樣子がよくわかる。(空蟬は)肝(きも)の潰(つぶ)れるやうな思ひがして、(咄嗟(とつさ)の間)どうともかうとも分別がつかず、そろりと起き出して、生絹(すゝし)の單一枚を來て、(室(へや)の外へ)拔け出てしまつた。源氏君は、(女が)たつた一人きり臥(ふ)つて居るので、(先づ)安心とお思ひになる。下段の間の床の下に、侍女が二人ほど臥つて居る。掛けてある衣を押しのけてお寄りになると、以前(見た時)の具合よりは、大きくしつかりしてる樣に感じられるけれども、(まさか、別人だとは)お氣附にもならないのである。(唯どうも)ぐつすり寢込んで居る樣子などが、變に違つて(思はれるので)、段々(人違であつた事を)お見定めになつて、呆れて氣色(けしき)が惡いけれども、人違をしなばたばかり侍りなむ」と聞ゆ。

さも靡かしつべき氣色にこそあらめ。童なれど物の心ばへ、人の氣色見つべく靜まれるをと思すなりけり。碁打ち果てつるにやあらむ。うちそよめきて、人人あがる。けはひなどもすなり。「女房若君は何處におはしますならむ。このみ格子はさしてむ」とて鳴らすなり。「源靜まりぬなり。入りてさらばたばかれ」と宣ふ。この子も、いもうとの御心は撓む所なく、まめ立ちた

れば、言ひ合はせむ方なくて、人少なならむ折に、入れ奉らむと思ふなりけり。

「紀伊守の妹も此方に在るか。我にかいまみせさせよ」と宣へば、「いかでかさ(る事)はし侍らむ。格子には几帳そへて侍る」と聞ゆ。さかし。されどもと、をかしく思せど、見つとは知らせじ。いとほしと思して、夜更くる事の心もとなさを宣ふ。この度は妻戸を叩きて入る。皆人々靜まり寢にけり。「この障子口にまろは寢たらむ。風吹き通せ」とて疊廣げて臥す。御達、東の廂にいと許多寢たるべし。戸放ちつる童も、其方に入りて臥しぬれば、とばかり空寢して、火明き方に屏風を廣げて影仄かなるに、やをら入れ奉る。如何にぞ、をこがましき事もこそと思すに、いとつゝましけれど、導くまゝに、母屋の几帳の帷引き上げていとやをら入り給ふとすれど、皆靜まれる夜の御衣のけはひ、やはらかなるしも、いとしるが)變だと思ふであらう。目的の婦人を探し出してみた所で、これほど遁れ避ける積りでは、到底無駄であつて、(空蟬は)馬鹿な男だと思ふであらうとお思ひになる。これが、(先刻見た)美しかつた火影の(女)ならば、どうもしかたが無い。(不承しよう)とお氣がお變りになるのも、けしからぬお實意の薄さであるなあ。(軒端荻は)漸く目が覺めて、實に思ひがけ無く膽が潰れて、びつくりした樣子で、何の思慮の深い所も、氣の毒さを感ぜしめる心構へもない。男女間の情愛をまだ解して居らぬ割には、洒落た方で、消え入る樣に(恥かしさうに)途方にくれもしない。(源氏は)御自分であるといふ事を、知らすまいとお思ひになるけれども、どうしてこんな事が(あつたのだらう)と、後なつて(軒端荻が)考へて見るであらう事も、(そして、眞相が分りでもしては)自分(源氏)としては、何でも無いが、あの辛い人(空蟬)が、一生懸命に世間を憚つて居るのも、流石に氣の毒であるから

度々の方違に託けてお出でになつたといふ事を、(實は、そなたに逢ひたい爲であつたといふ風に)大層巧みに、(本當らしく)お申しなしになる。(いくら巧みにいはれたとて、少し)思慮をめぐらして見る人ならば、眞相を悟る筈であるけれども、まだ大層若い心持には、あんなに斜端で、早熟て居るやうであつても、えうどうも判斷がつかない(やはり源氏のお口の通りに思つて居る)。憎いといふのではないけれども、御心の引き着けられる理も無いやうな氣持がして、やはり、あのつれない人(空蟬)の心をひどく恨めしくお思ひになる。何處にそつと隱れ忍んで、(我が擧動を)馬鹿らしいと思つて居る事であらう。このやうに頑固な女は、滅多にないものだのに、とお思ひになるにつけても、やはり、どうしても(空蟬の事が)お思ひ出されになる。此の人(軒端荻)の何の考もなく、初心らしい樣子も可憐であるから、流石に(多少氣の毒にも思はれるので)、情深さうに約束してお置きになる。「公然と逢ふ間柄よりも、かうした(忍ぶ)中は情趣の添

かりけり。女はさこそ忘れ給ふを、嬉しきに思ひなせど、怪しく夢のやうな(りし)事(の)心に離るゝ折なき頃にて、心解けたるいだに寝られずなむ。晝は眺め夜は寝覺がちなれば、春ならぬこのめもいとなく、嘆かしきに、碁打ちつる君、今宵は此方にと、今めかしくうち語らひて寝にけり。

若き人は何心なく、いとよくまどろみたるべし。かゝるけはひの、いと香ばしくうち匂ふに、ふものだと、昔の人もいつて居る。予がそなたを思ふ程、そなたも予を思つて下さいよ。(世間に)氣兼がないでも無い(窮屈な身だ)から、自分の體ながらも、思ふ通りに(自由に)もならず(其故度々逢ふ事も出來まい)、又、然るべき人々(即ち、そなたの親兄弟)も、(かうした逢瀬は)許されまいと、今から痛心されます。(だが、どうぞ)忘れないで待つて下さいよ」、などと、通り一遍のお話しをなさる。「人の思惑が恥かしうございますから、手紙もえうさし上げますまい」と、ただ思つた通りを其のまゝいふ。「みんなの人に知らせたら(不都合であらうが)、この小さい殿上人(小君)などにことつけて、便りをしよう。他に對しては、知らぬ顏をしておいでなさい」などと言ひ殘して、あの(空蟬が)脱いで置いた薄衣を(そつと)取つて、(この部屋を)お出になつた。

小君が近くに臥つて居るのを、源氏がお起しになると、氣遣ひながら寝たものだから、はつと目を覺した。小君は戸をそつと開けると、年とつた侍女の聲で、「あれは誰人」と、大聲で訊ねる。

顏をもたげたるに、單うちかけたる几帳の隙間に、暗けれどうち身じろぎ寄るけはひいとしるし。あさましくおぼえて、ともかくも思ひわかれず。やをら起き出でて、生絹なる單一つを着て、すべり出でにけり。君は入り給ひて、唯一人臥したるを心安く思す。床の下に二人ばかりぞ臥したる。衣を押しやりて寄り給へるに、ありしけはひよりは、もの〳〵しく覺ゆれど、思はしも寄らずかし。いぎたなきさだつて歩いていらつしやるの」と、氣を利かした積りで、(小世話を燒いて)外の方へ出て來る。小君は憎らしくて、「何でもないんだ。此處の所へ出るのだよ」と言つて、源氏君を(外へ)お押し出し申上げると、明方近い月が明らかにさし上つて、ふつと人影が見えたので、「もう一人いらつしるのは、誰人」と問ふ。(そして、老女は更に)「民部さんか、隨分立派なあなたの身長ですことなあ」と言ふ。(民部といふ名の侍女は、評判の)身長が高いのでいつも人に笑はれるのを(かう)いふのであつた。老女は、(小君が)この民部と連れだつて歩いて居たのだと思つて「(若樣も)もう直に同じ位の身長におなりでせう」と言ひながら、自分(老女)も、この(小君が開けた)戸口から出て來る。源氏は迷惑であるがえう又押戻す事も出來ないので、渡殿の戸口に(體を)附着けて、隱れて立つておいでになると、この老女が(お傍へ)寄つて來て、(老女は寢惚けた老眼に、源氏を民部だと思ひ違ひをして)「あな

まなどの、怪しく(やう)かはり(たるを)、やう〳〵見顯し給ひて、あさましく心やましけれど、人違とたどりて見えむもをこがましく、怪しと思ふべし。本意の人を尋ね寄らむも、かばかり遁るゝ心あめればかひなく、をこにこそ思はめと思す。かのをかしかりつる火影ならば、いかがはせむと思しなるも、惡き御心淺さなめりかし。やう〳〵目覺めて、いと覺えずあさましきに、呆れたる氣色にて、何の心深たは、今晩は御殿詰でいらつしやつたの。(私は)一昨日から腹痛がして、大變困難したものだから、下屋に(休んで)居りましたのを、人少なだからと言つて、お召になつたものですから、昨夜參上致したが、やはり、まだ我慢が出來さうもありませぬ」。ところ(老)ぼす。(他の)返事を聞かないで、「あゝ、お腹が〳〵(痛い〳〵。それでは)又直にお話し申しませう」と言つて行き過ぎたので、(源氏は)やつとの事でお出かけになる。やはり、こんな微行は輕率で、危險であつたなと、彌々お懲なされたであらう。

小君が、(源氏の)御車の後部に陪乘して、二條院に御歸邸になつた。(そして源氏は、昨夜の)首尾を(小君に)お申し聞けになつて、「(汝は)幼稚であつたな」とお小言を仰しやつて、彼の人(空蟬)の無情を、身ぶるひするやうにして、(不滿な態度を示して)お怨みになる。小君はお氣の毒で、えう物を申上げる事が出來ない。「(姉は、予を)大層憎んで居られるやうだから、自分の身も厭になつてしまつたよ。(會ふのが嫌なら)なぜ餘所なが

くいとほしき用意もなし。世の中をまだ思ひ知らぬ程よりは、さればみたる方にて、あえかにも思ひ惑はず。我とも知らせじと思せど、如何にしてかゝる事ぞと、後に思ひめぐらさむも、我が爲には、事にもあらねど、あのつらき人の、強ちに世をつゝむも、流石にいとほしければ、たびたびの御方違にことづけ給ひしさまを、いとよう言ひなし給ふ。たどらむ人は、心得つべけれど、まだいと若き心地に、さこそさらでも、同情ある返事だけはして下さらないでせうか。伊豫介にも劣つて居る此の身は、……」などと不快な事だと思召しておつしやる。(併し、それでも)流石に、先刻の小袿を御衣の下に入れて、御寢みなされた。小君を御傍に臥せらせて、いろ〳〵と怨んだり、又お話しになる。「おまへは可愛いけれども、辛い(無情な)人(空蟬)の緣續だから、えう可愛いと思ふ事も永續せまい」と、眞面目な調子で仰しやるのを、(小君は)誠につらい事だと思つた。暫らくお休みになつて御覽になつても、お眠りにはなれない。お硯を急にお取り寄せになつて、態々(先方へ)遣はされるお手紙といふのではなくて、ほんの懷紙にむだ書きのやうに、お書き散らしになる。

「空蟬の身をかへてける木の本になほ人がらの懷かしきかな」(源)

歌意。「蟬が木の蔭に殼を殘して行つてしまつたやうに、貴女は予を厭つて、薄衣だけを殘して去つてしまつたのに、やはり貴女の人柄が懷しい事よ。」(人柄に蟬の殼をかけた)。

し過ぎたるやうなれど、えしも思ひわかず。憎しとはなけれど、御心とまるべき故もなき心地して、猶彼のうれたき人の心をいみじく思す。何處にはひ(隱)れて、かたくなしと思ひ居たらむ。かくしふねき人は有難きものをと思ほすにしも、あやにくにまぎれ難く思ひ出でられ給ふ。この人の何心なく、若やかなるけはひもあはれなれば、流石になさけ〳〵しく契りおかせ給ふ。源「人知りたる事よりも、とお書きになつたのを、(小君は)懷の中へ入れて持つて居た。(源氏は)あの人(軒端荻)もどう思つて居るだらうと、氣の毒ではあるが、かたがた、(空蟬や軒端荻につき)いろ〳〵思慮をお廻らしになつて、(軒端荻へは)お傳言もなさらぬ。あの(お持ち歸りの)薄衣は、小袿で大層懷かしい(人の)移り香に浸みて居るのを、身にひつたりと添へて、御覽になつておいでになつた。

小君が、彼處(中川の家)に行つたので、姉(空蟬)は待ちかまへて居て、嚴しく言はれる。(即ち、叱りつけられる)。「(昨夜空は)呆れた事であつたが、どうやら逃れはしたものの、人の疑は逃れやうは無いので、非常に困つて居る。誠に、こんな(無分別)心の幼稚さを、(源氏君も)、一方では、何とお思ひになる事であらうし」。(即ち、お感じがよくはあるまい)といつて、お辱かしめになる。小君は兩方に對して、切なく思ふけれども(懷中して來た)あの(お歌の)おむだ書きを取り出した。(空蟬は、小言をいひながらも)流石に(心を引き付けられて)手に取つて見ら

かやうなるは、あはれも添ふ事となむ昔の人も言ひける。相思ひ給へよ。つゝむ事なきにしもあらねば、身ながら心にもえ任すまじくなむありける。又さるべき人々も許されじかしと(思ふに)、かねて胸痛くなむ。忘れで待ち給へよ」など、なほ〳〵しく語らひ給ふ。軒「人の思ひ侍らむ事の恥かしきになむ、え聞えさすまじき」とうらもなくいふ。源「なべて(の)人に知らせばこそあらめ、この小さき上人などにれた。「あの薄衣は伊勢の海士のすて衣のやうに、着古してくたになつて居た事であらうのに」と思ふと、一通りで無く、(赤面して)心が千々にかき亂れた。(本卷四五四頁解釋參照)

西の君(西の對に居る女、軒端荻)も、何だか極りの惡い氣持がして、(自分の部屋へ)歸つてしまはれた。又、他に知る人も無い密事であるから、人知れず茫然と、物思ひに耽つて居た。小君が、(あちらこちら)通るにつけても、(源氏の言はれた事などを思ひ出して)胸が一杯になるけれども、(更に)お便りも無い。(變だ)意外な事だと、氣がつく事も無くて、浮調子な氣持に(唯音信の無いのを)物足らず寂しいと思つて居るであらう。無情な人(空蟬)は、さやうに情を制しては居ても、隨分薄情でも無いらしい(源氏の)お樣子を(考へて見て)、人妻にならぬ昔の、處女の我が身であつたならば(源氏の思召を受け入れる事も出來ように)と、取り返しのつくものでもないけれども、耐へ切れないので、このお懷紙の片端に、

傳へて聞えむ。氣色なくもてなし給へ」などいひおきて、かの脱ぎすべしたる薄衣を取りて出で給ひぬ。

小君近く臥したるを起し給へば、うしろめたう思ひつゝ寢にければふと驚きぬ。戸をやをら押し開くるに、老いたる御達の聲にて、「あれは誰そ」とおどろおどろしく問ふ。煩はしくて「まろぞ」といらふ。「夜中にこはなぞ歩かせ給ふ」とさかしがりて外ざまへ來。憎くて「あらず。

「空蟬の羽におく露の木がくれてしのび〳〵にぬるゝ袖かな」

歌意。「蟬のはねに置く露が、木のしげみに隱れて見えない樣に、自分も人に隱れて、秘かに〳〵泣いて、涙に袖が濡れる事よ」。（と詠んだ歌を書きつけて見た）。

【解釋】 この卷は、やはり前卷の引續きで、源氏君十七歳の夏の事である。卷の名は、源氏の歌、「空蟬の身をかへてけるこの本になほ人がらの懐かしきかな」。空蟬の歌、「空蟬の羽に置く露の木がくれて忍び忍びにぬるゝ袖かな」などによつた。

うつせみ。〔言〕(一)「蟬の蛻」。(二)轉じて單に蟬とある。此の卷のも、蛻即ちぬけがらの方と、單に蟬といふ方と、兩樣に用ひて居る。

蟬は、昆蟲類中の有吻類に屬し、種類は隨分多い。乃ち、蟬は成虫・蛹・幼虫の三代を經る。各その時代に於て、其の形態を異にして居る。蟬はその蛹が十分に生長して、土中から掘ひ出し、樹上などに登り、その背部が自然と破れて皮を脱ぎ、成虫となるのである。その脱皮をさして、空蟬といふ。併し、其が單に「蟬」といふ事にも使ふ樣になつたのである。

こゝもとへ出づるぞ」とて、君を押し出し奉るに、曉近き月隈なくさし出でて、ふと人の影見えければ「又おはするは誰ぞ」と問ふ。「民部のおもとなめり。けしうはあらぬおもとのたけだちかな」と言ふ。たけ高き人の常に笑はるゝを言ふなりけり。老人これを連ぬて歩きけると思ひて、「今只今立ち並び給ひなむ」といふ〳〵、我もこの戸より出でて來。わびしけれど、えはた押し返さで、渡殿の口にかい添

憎まれてもならはぬを。「人に憎まれたる事も殆ど無い」といふ意。

「ならはぬ」は、(釋)「未馴れぬにて、俗になれ來らぬ」といふが如し」。大抵この意を取つてよからう。「覺えがないのに」と解して置いたが、「まだ習慣つけられても居ないのに」でもよい。或は「經驗も無いのに」などと解しても居る。

(え)ながらふまじくこそなりぬれ。　えが無くてもわかるが、あつた方が猶善いと思ふから〔穗河内〕の方に從ひてえを加ふ。

髮のいと長からざりしけはひの、似通ひたるも。〔穗河内〕にはかくある。〔湖〕には「けはひのさまの」とあるが、無き方然るべし。

廻り密らむも。「尋ね求めて近寄る事も」と解して置く。〔言〕(一)「尋ね探り取る」の意と殆ど同樣である。

いとほしく。　小君が、源氏の事を思ふ意。

さうざうし。　は、取り殘された自分の事を思ふのである。

よき程にてかくてとぢめてむ。〔穗河内〕〔頭書〕にはてがある。〔湖〕には無いが、それはある方がよからう。

「とぢめ」は「しまひ」である。〔言〕「綴」「とぢむること」「終へ結ぶこと」「終局」。

ひて、隠れ立ち給へれば、このおもとさし寄りて「おもとは今宵は上にや侍ひ給ひつる。一昨日より腹を病みていとわりなければ、下に侍りつるを、人少なりとて召ししかば、昨夜まうのぼりしかど、猶え堪ふまじくなむ」と憂ふ。いらへも聞かで「あな腹々。今聞えむ」とて過ぎぬるに、辛うじて出で給ふ。猶かゝるありきは、輕々しく危かりけりと、いよ〳〵思し懲りぬべし。

小君御車のしりにて、二條院

心づきなし。 この語は、往々「氣に喰はぬ」と解するやうだが、こゝは何だかそれでは、ちつと荒つぽい樣でもあり、且、一體が下卑たことばであるから、先づ「いま〳〵し」として置いた。「いま〳〵し」は〔言〕(三)の「嫌はしく憎く腹立たし」の意である。

女どちのどやかなる頃。 〔德河内〕なほ〔異本〕にも頃がある。〔湖〕には無いが、ある方然るべし。

ゆふやみ。 の引歌。萬葉四、相聞、

「夕闇は道たづ〳〵し月待ちていませわがせこその間にも見む」

この歌が少し變つて、新勅撰、戀歌、四、

「夕闇は道たど〳〵し月待ちてかへれわがせこ其の間にも見む」

「たづ〳〵し」も「たど〳〵し」も同じ事で、「はかどらぬ」意である。

えおぼしのどむまじかりければ。 「暢氣に寛りとお考へになつてゐる事は出來さうもないものだから」の意。「のどか」は副詞。「のどまる」は自動。「のどむ」は他動、二、である。自分で自分を制する事になる。

人見ぬ方に車引き入れて。 〔德河内〕にはかくあり。〔湖〕〔首書〕等には「人見ぬ方より」とあるが、これは「方に車」とある方然るべし。

ついそうせず。 「人のあとにつき從ふ事」であるから、「諂ふ」とも解

におはしましぬ。有樣宣ひて「幼かりけり」とあはめ給ひて、彼の人の心を、爪彈きをしつゝ恨み給ふ。いとほしうて物も(え)聞えず。「源」いと深う憎み給ふべかめれば、身も憂く思ひ果てぬ。などか餘所にても、懷かしきいらへばかりはじ給ふまじき。伊豫介に劣りける身こそ」など、心づきなしと思ひて宣ふ。ありつる小袿を流石に御衣の下に引き入れておほとの籠れり。小君をおまへに臥せて、よろづ

して居るが、こゝには「御機嫌取に寄りついて來ぬ」意と解す。

西の御方。 伊豫介の先妻の子、空蟬の繼女紀伊守の妹。西の對に住んでるのでかく言ふ。是が即ち、軒端萩である。

中柱。 〔評釋〕「中柱は壁につかぬ所の柱なり」、とある。今も猶、寺院の本堂などには、往々、かういふ柱がある。

みなうちかけて。 〔德河内〕〔異本〕にもかくあり、〔湖〕には無いが、ある方然るべし。

我が心がくる人ならむと。 〔德河内〕にはかくある。〔湖〕には「我が心がくると」とある。無くてもわかるが、ある方がはつきりする。

濃き綾の單襲。 は、大抵紫色であらう。今も單物の袖や、裾にするやうに單の襟、袖口、堅狩、狩等、みなよりぐけにしてある。これを、昔は「ひねりがけ」といつた。

ものげなき姿。 「目立たぬ姿」と解す。「見すぼらし」「見だてなし」などとも解する語である。

顏などもさし。 〔首書〕には「顏などもむかひたらん人などにも態と見ゆまじうもてたしたり。」とある。直次の「人などにも」と重なるけれど、やはりある方がよい。

に怨み且は語らひ給ふ。「吾子はらうたけれど、つらきゆかりにこそえ思ひ果つまじけれ」と、まめやかに宣ふを、いとわびしと思ひたり。暫しうち休み給へど寢られ給はず。御硯急ぎ召して、さしはへたる御文にはあらで、(疊紙に)ただ手習のやうに書きすさび給ふ。

源「空蟬のみをかへてけるこの本になほ人からのなつかしきかな」

と書き給へるを、ふところに

「態と見ゆまじう云々」は、額に額髪をふりかけて、やゝそばみて居るさまである。

手つきやせ〳〵。「痩々」と重ねてあるのは、「痩」の意を強めるので「大層痩せて居て」と解す。

二藍。 赤花と青花とで染めるから、かぐいふ。近代は、二藍色は紫のやゝ青みの勝つた色、先づ、今の桔梗色をかくいふと事である。二藍の織色といふのは、藍色と赤色との絲で織る。

つぶ〳〵と。「さる〳〵と」と解す。「くり〳〵」「ぱちや〳〵」などとも解して居る。

そぞろか。 身長の高き意。〔言〕「嗣」「身の丈の整えて高き狀にいふ語」。

花やかなるかたち。「はでな」と解して置いたが、本文の通り、「花やか」でも可い。又「にぎやかな」としても可からう。

さがりば。 髪のたれ下つてる工合の意。〔言〕「下際の略かと云」。「下髪の下り」。

ねぢけたる所。「變な所」と解す。「缺點」でも可からう。「ねぢけ」は眞直の反對である。

引き入れて持たり。「彼の人もいかに思ふらむ」と、いとほしけれど、かたがた思ほしかへして御言づてもなし。彼の薄衣は小袿のいとなつかしき人香にしめるを、身近く馴らしつゝ見居給へり。小君彼處に往きたれば、姉君待ちつけていみじく宣ふ。あさましかりしに、とかく紛らはしても、人の思はむ事さり所無きに、いとなむわりなき。いとかう心幼きをかつは如何に思すらむ」とて、恥かしめ給ふ。左

も、こは「顏や何かも」と解したいのであるから、この方に從ふ。

をかしく見給ふ。 爰は「可笑し」の方である。興がつておいでになる意。

けちさすほどなど。〔異本〕にはかくある。〔德河内〕〔湖〕其の他には「けちさすわたり」とある。それでも可からうが、直あとに「このわたりの」といふがあるし、かたがた、前者然るべし。

けちさす。「闕」。闕菲の語。「だめを詰めること」。

こゝろとげ。「敏捷さう」の意。「氣ばたらきのある狀」である。

靜かにのどめて。「壓へるやうにして」と譯した。「のどむ」は、〔言〕「他動」二。「ゆつたりとせさす」「しづむ」「おちつかす」「しづめて」でも可い。

ぢ。「持」これも闕菲の語。ぢ「せき」といふ。不ㇾ能ニ相害一の意。又、歌合の優劣無きをも、持といふ。

こふ。「劫」これも闕菲の語。〔言〕「おびやかすこと」「敵を劫して石を下し、敵必ずこれに應ぜざる能はざる如くして、他所を攻め、又守ること」。

伊豫の湯桁。 數多き事にいふ。伊豫國道後温泉の周圍に、湯桁を澤

右に苦しく思へど、彼の御手習とり出でたり。流石にとりて見給ふ。彼のもぬけを如何に、伊勢をの海士の、しほ馴れてやなど思ふもただならず。いとよろづに(思ひ)亂れたり。西の君も物恥かしき心地して渡り給ひにけり。又知る人もなき事なれば人知れずうちながめて居たり。小君の渡り歩くにつけても胸のみ塞がれど、御消息もなし。あさましと思ひ得る方もなくて、されたる心地に物あはれなるべし。つれなき人もさこそしづむれどいと淺はかにもあらぬ御氣色を(思ひ知るに)、ありしながらのわが身ならばと、とりかへすものならねど、忍び難ければ、この御疊紙の片つ方に、

「空蟬の羽に置く露のこがくれて忍び〳〵にぬるゝ袖かな」。

(繪入源氏に據る)

山渡してあるからかくいふ。軒端荻の父が伊豫介なれば、其に因んで面白く書いたのである。

〔孟〕「六花集に古歌とて出だせり。『いよの湯のゆげたの數は左八つ右は九つ中は十六』すべて三十二ありといへり」。(下略)

猶催馬樂にも「いよの湯のゆげたはいくついさしらすや云々」とあり。

そぼる。「はしやぐ」俗語にかく解して置く。〔河海〕たはぶれたるなり。俊成卿女說に、「ほこりたるこころなり」。〔言〕(一)「戯」「たはむる」「戯る」。「あさまし」。「つまらない」の意。〔言〕(二)「興醒む」

さも。〔言〕「副詞」「然にもの感動詞を添ふ」(一)「そのごとく」「そのやうに」(二)「その事情にかなひて實に」。

久しう見給はまほしきに。〔德河内〕〔異本〕にもかくあり。〔湖〕には見給へまほしきに」とあるが、はの方を採る。

小君出て來る(音)すれば。〔德河内〕音とある。〔湖〕其の他には「こゝちすれば」とあるが、前のに從ふ。

この音は、今なほ京畿方面では、氣配はけはい、樣子等の事にも使つてゐるが、こゝのも、馨といふよりも、氣配、樣子の方である。

今宵もかへしてむとや。〔德河内〕〔異本〕にもかくある。〔湖〕には「今宵もやかへしてむとする」とあるが、前の方然るべし。

あがるゝけはひ。「退散する樣子」の意。〔言〕「別る」「放る」。「あがる」と濁つて讀む事になつて居る。

この御格子はさしてむとて鳴らすなり。立派な寢殿造の家などの格子は、大きくもあるから、隨分重いので、女の手で下して閉めようとするには、可なり骨が折れるから、がた〳〵音がするゆゑかく言ふ。(本卷四六〇頁評說參照)

まめだちたれば。「貞實に思はれるから」と解す。〔言〕「眞實の轉かと言」。(一)「眞心なること」「まこと」「信實」「深切」「まじめ」。總じて「だつ」「めく」などといふことばは、「……のやうに見える」の意に用ふるから、小君が見て想像した方から、かう解したが、單に「貞實であるから」と解しても可からう。

いかでかさる事はし侍らむ。〔德河内〕〔異本〕にもかくあり。〔湖〕には「いかでかさは侍らむ」とあるが、前の方がはつきりするから、この方に從ふ。

たゝみ。 當時「疊」とあるのは、今の薄緣の事である。〔言〕（一）「たゝむこと」。（二）「藺」「席」「薄緣の類」。

怪しく夢のやうなりし事の。 「夢のやうなりし事を」〔德河内〕にはかくあり。「事の」と、〔異本〕にあり。〔湖〕には「夢のやうなる事を」とあるが、「夢のやうなりし事の」とある方然るべし。

春ならぬこのめ。 引歌。〔河海〕「よるは覺めひるはながめに暮らされて春はこのめもいとなかりけり」。今は夏であるから、「春ならぬこのめも云々」といつたのである。

いまめかしく。 「華々し」。とも譯して居るから、「賑やか」と解して置く。又「陽氣に」などでもよからう。〔言〕「いまめくやうなり」「當世風なり」。

ひとへうちかけたる。 几帳の垂布は、夏は單で、冬は裏がある。其故、こゝはかくいふ。〔萬水〕「几帳帷子二重なるべきを、夏なれば單と書けり。」

もの〳〵し。 「大きくしつかりして居る」の意。

もののけ等いふものと相通ず。〔言〕「動物」（一）「物と認むべく嚴し」「物體あり」「立派なり」「雄偉」。（二）「をこがまし」「たいさうらし」。

怪しうやう變りたるを。 〔異本〕にも「やう」があり〔湖〕にも〔德河内〕にもこれは無いが、ある方然るべし。「變りたるを」〔德河内〕〔異本〕にはかくあり、〔湖〕には「て」とあるが、前者を採る。

用意。 これも、普通に「心がまへ」と釋したが、用意なる語は、大分意味深重である。一寸言つて見れば、圓滿な常識に、品位と氣活きと、且、甘味を加へたやうなものらしいのである。

さればみたる方。 「酒落た方」と解しては置いたが、猶それに、處女としては、若き男子に對する羞恥や、恐怖の念の少ない意を含むのである。

たどらむ人は。 「たどる」は、「尋ね探り取る」の意であるから、「思慮を廻らして推測し當てる」意味である。

さし過ぎたるやうなれど。 はすはで早熟て居るやうであつても、と解す。それは、「世の中をまだ思ひ知らぬ程よりは、さればみたる方にて、あえかにも思ひ惑はず」といふ所から、意味を採つて來たのである。直譯すれば、「出しやばつて居る」「こましやくれて居る」などといふ解もあるが、先づ、かうして置かう。

うれたき人の心をいみじく思す。 「うれたし」は〔言〕「憂甚し」の意。「うれはし」「なげかし」とある。無情な意にとつて、「つれない」と釋す。「いみじ」は「甚し」の意であり、形容詞であるが、これのみを用ふる時は、下の目的の名詞を省きて、形容詞にその意味を含ませるものであるから、「ひどく恨めしくお思ひになる」と解して置く。

いづこにはひ隱れて。 〔德河内〕にはかくあり。〔湖〕には「はひまぎれて」とある。いづれでも可からうが、直このさきに「まぎれ離く」ともあるから、隱れとある方を採る。

しふねき。 「執念」の字音をはたらかしたのであるから、直譯すれば「執念深い」とでもいふのであらうが、其ではこゝには、不適當であらうから、先づ「頑固」と解して置く。「强太い」といふ解もあるが、やはり、十分とは思はれぬやうである。

なべての人に。 〔異本〕にはかくあり。〔湖〕〔德河内〕等にものは無いが、ある方然るべし。

小さきうへ人。 小君の事である。童殿上したと見える。（本卷評說四六三頁參照）

氣色なくもてなし給へ。 〔德河内〕〔首書〕にはかくあり。〔湖〕には「氣色もなく」ともがあるが、無き方然るべし。

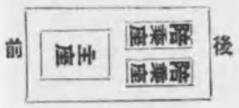
脱ぎすべしたる。「脱いだ」事であるが、すべ〳〵した、滑りのよい薄衣などを、一寸引つかけて被つて居るのであるから、その脱ぐ時、するりとすべらかして、下に引き落すのである。即ち「脱ぎすべらかして置いた」のであらう。

おどろ〳〵しくとふ。「大聲でたづねる」と解して置く。「おどろ〳〵し」は、〔言〕に「驚くべくあり」「仰山なり」とある。「仰山にたづねる」でもよからう。

おもと。 對稱の代名詞であるが、女子に限る。そして、親しみに稍敬稱の加はつて居ることばである。

これをつらねて歩きける云々。「連れだつて」の意。つらねは他動、つらなりは自動、つらなるは「列になる」の意で、複合したのである。古語の「つれゆく」は、つらなりゆくと同じであるが、今は「伴ふ」意にとる。

わびしけれど。「迷惑であるが」の意。「わびし」は〔言〕「侘」〔形〕、二、(一)「わぶべくあり」「なやましし」「難儀なり」(二)「わびしくて靜かなり」「幽寂」とある。今猶京畿方面では「迷惑だな」などといふ事を、往々「難儀やな」といつて居る。



わりなければ。「困難したものだから」の意。

小君御車の後にて。 後乘である。現今の馬車自動車は後部が上座であり、往昔の牛車は、前面が上座であるから、陪乘者は、後部の方に、即ち引き入りて乘るのである。

あはめ。 他動「淡くする」〔言〕「疎む」とあるが、往々叱るやうの意に用ひて居るから、「小言をいふ」事に解す。

爪はじき。 これは、自分の忌み嫌ふ物を、彈き飛ばす狀態である。「身ぶるひするやうにして」と解す。

ものもえ聞えず。〔首書〕にはえがあり、〔湖〕〔德河内〕などには無いが、ある方然るべし。

まめやかに。「眞面目な調子で」の意。俗の「眞餘」とする方が當るかも知れぬが、こゝの源氏の態度を顯はすには、何だか少しつぎ〳〵しく無い樣だから、取りやめたのである。

たゝうがみ。「たゝみ紙」の音便。懐紙である。今の鼻紙といふところであるが、昔のは、多くの場合、懐紙は物を書く用に使つた。現今も、皇族以上の御方がたが、衣冠を召す時に用ひさせられる鳥の子である。それには、金泥のゑもやうなどを施したものもある。

手習のやうにかきすさび給ふ。 むだがきである。「すさぶ」は、やはりむだ書きする事で、遊戯的に書く意味に用ふるから、「書き散らして」と解して置く。

うつせみ。「空蟬」。(一)「蟬の蛻」〔本卷四四二頁解釋參照〕

彼の薄衣は小袿のいとなつかしき人香にしめるを。 源氏が、薄暗い所でお立ちがけに、手當り次第に、そつと携へてお持歸りになつた。その薄物は、小袿であつたと、こゝに、説明を附したのである。

人香、即ち、人の移り香の意。香を焚きしめて、着馴れた小袿。

心幼きを。〔首書〕にはかくあり。〔湖〕〔德河内〕などには「幼き心ばへ」とあるが、首書の方然るべし。

わりなし。「しかたが無い」の意にも取るのであるが、こゝには、「困つた」と解す。

もぬけ。 脱ぎすべした着物の意。源氏の歌の「身をかへてける」「人がら」などの緣語を使つて、蟬脱と言つたのである。

いかに『伊勢をの海士の。 引歌、後撰、十一、戀歌三、「女のもとに衣を脱ぎ置きてとりにつかはすとて、伊尹朝臣、「鈴鹿川伊勢をの海士のすて衣しほ馴れたりと人や見るらむ」

よろづに思ひ亂れたり。〔徳河内〕には思ひとあり、〔湖〕にはないが、ある方然るべし。

御氣色を思ひ知るに。〔徳河内〕にはかくあり。〔湖〕にはないが、これは、ある方尤も然るべし。

取りかへすものならねど。 引歌〔帚木卷三七九頁解釋參照〕

とてやみにけり。 卷の結尾に、〔徳河内〕にはかくある。これを採つた向もあるが、無い方が寧ろ可からう。

【評說】 ○髮のいと長からざりしけはひ。 自分は、源氏が先夜の空蟬のさまを追想して、小君に思ひ及ぼされた事と、過去にとる。〔細流〕が贊同せる〔按〕の說に從ふ。

○なみ〳〵ならず。「並々ならず、かたはらいたしと思ふに」であるから、「並一通りで無く、御氣の毒」と解すべきであらう。〔箋〕の、「普通の人にもあらぬ貴人と云也、そこを空蟬の思ひ知るなり」。とあるは、當るまい。

○思し懲りにけると思ふに。〔玉補〕の、「けるの下に『よ』をそへて心得べし」。の說が、善いと思はる。

この「思しこりにける」より以下、「ただならずながめがちなり」と、空蟬の心理を寫し出したのは、實に、眞に迫つて細かい。人間の心には、往々かういふ矛盾めいた事が起る。それ即ち、理性と情性との混亂した內的鬪爭である。空蟬は、心に染まぬ、親子の樣に年齡も相違する老受領に嫁したのである。そして突如として、當時理想的の若き貴公子に、熱愛の情を注がれる事になつた。此の場合、隨分迷ひも煩悶も起つたであらうが、賢明なる彼の女は、遂に理性が凱歌を揚げて、情性の動搖を征服したのである。が、こゝに於ても、是を守り通した心の堅壘、其の成功は、節義貞操が第一の支柱ではなくて、品位格式を重んずる所の氣位を保ち、塵もつけじと念ずる眞美の偶像を傷けたくないといふのが目的であるから、從つて、此の中には、節義貞操も自ら含まれて居る事にはなる。さうで無ければ、鹽谷夫人のやうに、熱愛者をぴんと跳ねつけた後に、空蟬が、源氏と斯んな歌の贈答などをする筈はないではないか。

○小君の「煩はしけれど、かゝる方にても、宣ひまつはすは、嬉しう覺えけり」 の一段を、前章の「例の樣にも宣ひまつはさず、夜深う出で給へば、この子はいとほしくさう〳〵しと思ふ」といふ所に當てて見ると、其の人情が、能く汲み取らるゝ。一方には、姉が煩悶する。そして、自分は叱られる。なか〳〵容易に使命を果す譯にはゆかない。極めて面倒な事であり、善くない隱しごとであるけれども、こんな事でも、主君から親密にされ、從つて可愛がらるゝといふ事は、嬉しいのである。君寵を得んが爲めには、堂々たる分別盛の有髯男子すらも、往々邪道に蹈み込むのである。況んや、まだ少年の小君では、無理もない事であらうが、かういふ事から、次第々々に君の非違を助けて、臣節を過まるに

至る。初歩毫釐の過は、遂に千里の差を生ずるもの、實に恐るべき次第である。

○この子も幼きを云々。　源氏の腦裡にも、理性と情性とが鬪ひつゝ、遂に情性が勝つて、危道を踏まるゝ事になるが、それでも、終始不安の念に驅られて、さまざまに思案さるゝ所が、誠に、さもあらうと推測さるゝのである。小君はまだ子どもであり、空蟬が連れて來た弟といふ位置であるから、紀伊守邸の番人達も、一向重きを置かず。その出入も、餘り氣に止めないで看過する邊り、又小君が一人歸つて來た風をして、態と格子を叩きのゝしる狀、及び「暑ぐるしいのに」といつて、開つ放して置いて、源氏をそつとお入れしようとする工合など、實に細かい。

○こゝへ軒端荻を配して、空蟬と碁を打たしたのも、一寸平調を破つて面白い。

碁は奈良朝を通じて、當時上流にも非常に流行し、女子も翫んだものである。これは、支那からの渡來で、吉備公が始めて傳へたと言はれて居るが、どうも、其の以前からあつたらしい。支那に於いては、帝堯が創作して、其の子丹朱に敎へたといひ、又、帝舜の作だともいふが判然しない。が、兎に角隨分古いものらしい。

そして、現今世上に行はれて居る圍碁は、大分、支那傳來當時のしかたとは異つて來て居るといふ事である。

○濃き綾の單襲なめり、何にかあらむ上に着て。　〔花鳥〕「(上略)、ひとへ二つをひねりかさねたるものなり。(中略)濃きとは、濃き袴の事なり。濃き紫に染めたるべし。〔河海〕に、紅の色濃きと註されたり。いかがとおぼえ侍り」。

誠に判然せぬ書き方であるが、一體は、油火の薄暗い影の下の、婦人を寫し出したのであるから、「何にかあらむ」と、態とほのかに書いてある事を考へると、こゝは、解釋者も餘り强ひて判然した推測を極めぬ方が、却つて可くはないかと思つて、口譯には、雜と譯して置いたのである。明治時代(と申しても其の以前、近世はずつとさう稱して居たらしいが)單に「濃き」といふのは、紅の事である。そして、其の色は黑ずんで、一寸、俗の濃い栗梅色に似て居る。中古は「濃き」とのみあるのは、紅と紫とをいつた樣であるから、紫と解せぬ事もなからうが、單襲であるから、濃紅の單襲の上に、何か着て居たものと解してよからう。

何故ならば、次の軒端荻の衣裳が、二藍の小袴らしいから、是に對照して、空蟬は、濃き紅の單襲の上に、或は、細長か袴かを着て居たと想像しても、不適當ではあるまい。そして、いくら內々の人でも、他に對坐するに、女が單だけで遇ふと言ふ事は、絕對無いと思はる。明治時代の宮中、我々が局に居た時でも、隣の部屋の同僚が一寸見えても、座側の衣桁に掛けて置く所の表着を、引き下して被る例になつて居るのである。

○ばうぞく。　これも、大分說がある。〔細流〕曰く。「〔河海〕には傍側云々。〔花鳥〕には飽足なり。

にぎはゝしくほこりかなる心と云々。然れども傍側猶宜しきか。傍若無人の心なるべきか。はばかる所なき心なるべし。〔玉の小櫛〕傍側。飽足など註あれどいかが。〔拾遺〕に放俗の字をあてたれど、これもいかが。すべてかやうの字音の詞は、その意によりては、字は當てがたきものなり。字は字にて、意はあらぬさまにも轉じ用ふるものなればなり」。

かういふ風にいろ〳〵の説もあるが、兎に角當時は、漢音呉音が交つて用ひられ、又、音便をも用ひ、それが時としては、訛つても行はれて居たのであるから、先づ、前後の語義を辿つてみて、「だらしない」と、口譯には解して置いた。「傍若無人」の意にも通ふと思はれるが、これでは、少し語意が強過ぎる樣である。まあ「無遠慮」といふ程の所であらう。〔廣道説〕暴側の意にて、胸のあきて身の側まで見ゆるを、側を暴すといへるにもあらんか。

○兩女の姿態動作が、あり〳〵と能く寫し出されて居る。そして、源氏が注目される空蟬は、十分に見えないで、ふと現出した軒端荻が、却つて、判然見える所も面白いが、是は、次の條の伏線である事は、既に從來の諸氏の評にも見えて居る通りであらう。其が、なか〳〵巧みに取り扱はれて居る。

軒端荻は、豊かな家の女で、なか〳〵美しく、一寸氣も利いて居る。父親の寵愛を一身に集めて、生活等には何の苦勞も無く、世の中を樂觀的に過ごして、無邪氣な誇らしげな、少し我が儘らしい樣子も、本當にさうありさうに書きなしてあると思はるゝ。

一方の、はしやいて居るのに反して、他方のうち沈んで居る態度も、そして容の美の、心の美に及ばぬ所も、誠に興味深く、且は好き教訓であると感服する。

○ねびれて。　これは、難解である。先づ、諸説を掲げよう。〔師説〕「寢おびれたる顏のやうなりとなり、目の腫れたる故なり」。〔玉の小櫛〕「『あさやかなる所なう』といひ『にほはしき所も見えず』といへるぞ、すなはち此の詞の註の如くなる。草木の萎えしぼみたるやうのさまなり」。〔湖月抄〕「〔師説〕ひがことなり」。

「しぼんだやう」「年寄り臭く」といふやうにも譯してあるが、はつきりせぬ。自分が「しよんぼりとして低く」としたのも心ゆかぬが、先づさうして置かう。

○たとしへなく。　意譯すれば、「非常に」でもよからうとは思ふが、先づ本文に近い直譯にして置く。

○この繼母空蟬と、繼女軒端荻との對照は、頗る興趣が深く、且は、一つの好訓誡である。一方は、あまり美人の方ではない。否、寧ろどちらかと言はば、醜い方であるともいへよう。が、自己を知る所の嗜みから、極めて裝飾が巧みである。年齢よりは地味で、目立たぬやうな化粧のしかたから、衣裝の配合に五分の隙もない上に、心の美が加はつて居る。一方は、先づ美人型であり、若々しくある。無邪氣で華やかで、如何にも陽氣である。前者が、身の不遇に悲觀して、彌々憂鬱的にうち沈んで居るのに反して、後者は樂觀的で、何の苦勞も知らない、得意然たる境遇に置かれる所の處女である。才走つて居る

が、思慮は短い。前者の飽く迄奥底に深みのあるのと違つて、後者は開けつ放しで心は輕く淺い。源氏の如き、情趣を味ふ事の深甚な人には、此の空蟬の眞價はよく分る。

けれども、後段のゆくりなき失策も、如何にも、常に好奇心に驅らるゝ貴公子にありさうな事である。「淡つけしとは思しながら、まめならぬ御心は、これもえ思し放つまじかりけり。見給ふ限りの人は、うち解けたる世無く、ひき繕ひそばめたる表面(うはべ)をのみこそ見給へ云々」とある。誠に、其の通りであらう。都會人の巧妙に修飾した美に見飽きた者は、田舍の茅屋叢林の繕はぬ自然美を賞讃するのが當然である。

故に、まだ思慮の固まらぬ富貴の家の子弟は、往々、つまらぬ暗黑面の女性に熱中して、大失敗を來す事が珍らしく無いのも、げにと首肯(うなづ)かれる次第である。

○格子を下す所に、「鳴らすなり」とあるは、全く大きな重いのを閉めようとするには、可なり力が要るから、女手などで爲すには、勢ひがた〳〵と音がするであらう。枕草紙にも、朝早く大齋院から御使の來た時、清少納言がそれを、御寢中の定子中宮へ申上げようとして、まだ男の役人も出仕せぬ前だから、一人で、御格子を骨を折つて上げかけたが、非常に重いので、がた〳〵音がする。それ故、中宮がお目覺になつた事などが記してあるのを見てもわかる。

○たゝみ。　は、〔解釋〕に言つた樣に、薄緣である。〔細流〕に「屏風なるべし」とあつて、それから、段々他の解釋にも過られて居る。

「雅望考るに、古のたゝみは、今のうすべりなり」「案に此の說宜し。…常に寢ぬ所なれば、敷くべき物なき故に、薄緣の疊を廣げて臥したるなり」。

右の通りで、大體然るべしと思ふが、當時帳臺などを置いて、ちやんと寢床に臥る樣な人でなく、或ひは又、假初に就寢する際等には、疊即ち、薄緣を敷いて寢たものらしい。古い繪卷物などにも、さういふ圖がある。今も猶、ある所では用ふる「ねござ」なるものが、其の名殘(なごり)であらう。

○夢のやうなりし事の。　とあれば、論は無いが、多く「夢のやうなる事を」とある所から〔玉の小櫛〕に「このを文字下にうけたる詞なくてはいかが。のとあるべき語なるをや」。といはれたのは、いかにもその通りであらう。

○女はさこそ忘れ給ふを、嬉しきに思ひなせど云々。　こゝにも、空蟬の心中、情性と理性との錯雜矛盾(さくざつむじゅん)の狀を、あり〳〵と寫し出して居る。そして、神經は尖(とが)つて居て、なか〳〵眠られぬ所から、直に、源氏の行爲に氣がついたのであるし、一方軒端荻は、何も知らず無邪氣で、且若い健康體は、心持よく、ぐつすりと寢込んでしまつた狀態も、いかにも、さうありさうに思はるゝ。

○生絹なる單一つを着て、すべり出でにけり。　身分ある婦人は、縱令夜中でも、內衣ばかりを着て、室外へ出る筈は無いのであるから、空蟬が、氣も轉倒する程驚いて居る、突嗟の間にも、單だけは着

て拔け出した譯である。

源氏が人違を見顯して、失望もし呆れもし、多少腹も立つが、併し、是程迄にして避け隱れる者を、强ひて追ひ廻して見た所がしかたが無い。あの、先刻見た美しいむすめであるのなら、えゝまあ不承しようといふあたりは、全く若き驕兒の裏面を、遺憾無く暴露したものであるし、又軒端荻の、「何の心深くいとほしき用意もなし。世の中をまだ思ひ知らぬ程よりは、ざればみたる方にて、あえかにも思ひ惑はす」とある。是では、必然男子に蹈み込まれるに相違なく、且又直に捨てられるにも極つて居る。一方、空蟬に對しては、「あの辛き人の强ちに世をつゝむも、流石にいとほしければ」と、源氏は、且そのつれなさを恨みながらも、空蟬には敬意を拂つて、彼の女の名を出すまいとせられるのに反して、軒端荻に對してはさうでない所に、若き女性は着目すべきである。守節の志操薄く、品格を重んずる念慮に乏しい人は、自ら他の輕侮を受けるものである。從つて、翫弄物視して置いて、捨てても大して氣の毒とも感じないのは、どの途誰にでも靡くのであらうから、自分だけが、そんなに心配氣兼をせずともよからうといふ樣な、身勝手の考へを、往々、男子はするらしい。況んや、當時の世相に於けるをやである。

○こゝの源氏の心理狀態の矛盾も、よく寫してある。一方、我が意に從はぬ空蟬は、「ます〳〵恨めしく、いま〳〵しいが、併し、「あの辛き人の强ちに世をつゝむも、流石にいとほしければ」といふやうに、やはり空蟬の迷惑を思ひやつて、お庇護になり、又「かくしふねき人は有難きものをと思すにしも、あやにくに紛れ難う思ひ出でられ給ふ」とあり。怨恨と愛着とが混亂廻轉しても、なほ空蟬に對しては、始終敬意を加へておいでになり、一方、忽ちに我が意に從つた軒端荻は、「憎しとは無けれど、御心のとまるべき故もなき心地して」とある。實に、輕率な無思慮な若き女性の爲には、返す〴〵も好き訓戒である。又、源氏の「つゝむ事無きにしもあらねば、身ながら心にもえ任すまじくなむありける」といふことばは、勿論お心がとまらぬ故に、かねて杜絶もすべき豫防線を敷かれたのである事は、申す迄も無い。「斯く宣ふは、軒端荻の御心につかぬ故に、今よりと絶おき給はむ下組をして宣ふやうに書きなせし樣言外に匂ひたり」と〔評釋〕にもある通りであらう。

○この小さき上人。　これは、勿論、小君を源氏がさされたのであるが、帚木卷には、紀伊守が源氏にお答することばとして、「殿上なども思ひかけながら、すが〳〵ともえ交らひ侍らざめる」とありて、第二回目に方違においでになつた時に、源氏が、紀伊守に「かのありし中納言の子は得させてむや。（中略）うへにもわれ奉らむ」といはれて居る。して見れば、其の後源氏がお世話にて、小君が、童殿上もした事であらう。

○源氏の潛入の折柄、腹痛の老女が飛び出して、何の惡意も無い咎めだてに、源氏程のお身分の方が、惚々（ぼく〳〵）して、やう〳〵の事で遁れ出て、「なほかゝる歩きは輕々しく危ふかりけりと、いよ〳〵思し懲りぬべし」とあるは、なか〳〵面白い。一寸、この頂門の一針は、利けて居る。

○源氏が、小君にお話しかけになる所の、「いと深う憎み給ふべかめれば」より「伊豫介に劣りける身こそ」迄は、姉の空蟬に對しての恨みを、弟の小君に、態と誇張して仰山に言はれたのであり、眞面目に宣ふ態度も、勿論、小君をお嚇しになる爲のしぐさではあるけれども、さりとて、全く凡てが狂言では無い。多感な源氏は、空蟬にかう迄回避せられると、却つて益々情が激烈になるので、恨みつゝ、且は懷しみつゝ、ありつる小袿を、御衣の下に引き入れておやすみになるあたりは、大人びておいでになる樣でも、やはり若き貴公子の、まだ世に馴れぬ初心な心理狀態が、さもと思はれるやうである。

○姉(空蟬)は(弟の)小君を、歸つて來たら嚴しく叱りつけて、訓誡しようと待ちかまへて居た所へ、小君が來たから、非常に叱つたり、辱しめたりして、向後を誡めながらも、小君が懷中に潜ませて持參した、源氏の御書には、流石に心を引きつけられて見つゝ、「ありしながらの我が身ならば」と、又しても、心の裡には愚痴が出て、「とり返すものならねど」と殘念に思ふあたりも、稍もすれば動搖する心の狀態を、細やかに寫し出してある。

○落ちついて居て、そして、奥深い空蟬に對照して、軒端荻の、浮つ調子で淺慮な樣子が、明瞭に寫し出されて居る。即ち「あさましと思ひ得る方も無くて、されたる心地に物あはれなるべし」とある。さてこそ源氏も、「彼の人(軒端荻)もいかに思ふらむといとほしけれど、かたがた思ほし返して御言づても無し」といふ樣に、輕視せられる譯である。「人自ら侮りて、後人これを侮る」といふ古言も、なる程と首肯かるゝでは無いか。

○前述の如く、此の空蟬卷は、前の帚木卷の延長繼續であるが、更に一寸、全篇の意のある所を摘んで略述し、且、特に注意を引く個所をも抽出して、少しく卑見短評をも加へて見よう。

卷中に活動する兩女性、即ち、空蟬と軒端荻との狀態を、更にこゝに少しく寫し出して、各自の心の美と、容の美とを對照し、そして、源氏の心は、勿論前者に引き付けられつゝ、而かも、存外强情で意に從はぬ辛さを、怨みもし憤りもしながら、猶敬意を拂つて、彼の女の迷惑にならぬ樣にと、暗々裡に庇護して居られ、後者の、直に靡いて可愛らしくも美しくもあるのには、可憐でもあり氣の毒でもあるが、一向お心は留らぬさまを述べそして、次の夕顔卷に、軒端荻には、夫が定まつたとお聞きになつても、即ち「今一方はぬし强くなるとも、變らずうち解けぬべく見えしさまなるを頼みて、とかく聞き給へど、御心も動かすぞありける」と言つて居る。そして、一寸お便りをなされた時も、「忍びてと宣へど」、高い荻につけてお文をお遣りになつて、なあに見つかつたつても仔細ない。と言ふやうに考へておいでになる。是等について見れば、意思の堅固な、人格の高い人に對しては、何人も敬虔の念が湧き、之に反する者に對しては、輕侮の心を生ずる有樣を、能く寫して居るのである。

故に注意して讀めば、隨分女子の訓戒に資すべき寓意が含まれて居ることを感ずるのである。

又、人は常に情性と理性とが、心内に對立して、或は衝突を起し、矛盾を來たす事がある。それらの狀

態を示して、そして、女性の空蟬は寧ろ、遂に理性の勝つた結果を來たし、男性の源氏は却つて、往々情性に負けた始末になる事を、女性なる作者が描いたのも、面白いではないか。

此の卷の兩女性が、圍碁の光景は、嘗て帚木卷に「中の品になむ人の心々己がじゝの立てたる趣も見えて云々」とあつた所の、中流社會の家庭の有樣が能く描き出されて、其が極めて細緻に、巧妙に寫してある故か、大に世上にもて囃されて、繪畫などの材料にも、屢々採られて居り、隨分有名なものとなつて居るのである。

猶小君が小さき腦漿を絞つて、幼稚な工夫を精一杯に凝らし、源氏を案内する所なども、如何にもさうありさうに、眞に迫つて居る。

殊に光源氏の君が、光を避けつゝ暗處に潜入し、古女房に誰何せられて閉口し、蝙蝠のやうに戸口にくつ着いて居られる所を、老女が寢ほれた老眼に見過られたのを僥倖として、ほう〳〵の體で逃げ歸られる狀態も、亦且、老女が腹痛に惱んで、「あな腹々。今聞えむ」などと言ひつゝ、下腹部を押へて屈まりながら、よち〳〵歩き去る有樣なども、頗る滑稽でもあつて、可なり興味をそゝらるゝ。

そして、なほ一種貴公子に對する諷刺の寓意を含まれて居るのである。

女官小袿衣色目

（本稿は著者が宮中奉仕中、明治九年十月、當時の女官の小袿衣色目重を心覺えの爲に書きとめ置きたるものに據つたのである。）

御盃之節

一　表　白ねもじ
一　裏　白すゞし
同斷
一　表　白ねもじ
一　中部　蘇芳
一　裏　萌黄
同斷
一　表　薄紅ねもじ
一　中部　萌黄

一　裏　紫
同斷
一　表　白ねもじ
一　中部　薄紅
一　裏　紅

春之部

●紅梅
表　薄紅
中部　萌黄
裏　紫

●櫻萌木
表　萌黄
中部　白
裏　薄紅

●藤
表　薄紫
中部　白
裏　萌黄

●山吹
表　黄
中部　紅
裏　青

●梅
表　白
中部　紅
裏　蘇芳

●又は
表　白
中部　薄紅
裏　紅

●桃
表　薄紅
中部　白
裏　青

●かば櫻
表　蘇芳
中部　花田
裏　紅

●躑躅
表　蘇芳
中部　白
裏　青

●つぼみ紅梅
表　紅梅
中部　青
裏　蘇芳

●櫻重
表　白
中部　紫
裏　赤花

●裏山吹
表　黄
中部　青
裏　紅

夏之部

●卯花
表　白
中部　蘇芳
裏　萌黄

●若かへ手
表　薄萌黄
中部　薄紅
裏　紅

●花橘
表　朽葉
中部　黄
裏　青

●菖蒲
表　萌黄
中部　薄萌黄
裏　朽葉

●撫子
表　紅梅
中部　白
裏　青

秋之部

一　女郎花
表　黄
中部　薄黄
裏　青

一　紅葉
表　紅
中部　青
裏　蘇芳

●萩
表　蘇芳
中部　白
裏　青

冬之部

一枯野　表香　中部花田　裏青

一●雪之下　表白　中部薄紅　裏紅

雜之部

一●松重　表萠黃　中部香　裏紫

一●薄色　表蓮紫　中部白　裏紫

一●蘇芳香　表蘇芳　中部黃　裏蘇芳

一●白うすやう　中部紅　裏白

一●皆紅　表紅　中部薄紅　裏紅

一●ゑびぞめ　表蘇芳　中部黃又は紅　裏花田

常着用中部無し

一柳　表白　裏青

一櫻　表白　裏紫

一山吹　表黃　裏青

一梅　表白　裏蘇芳

一藤　表紫　裏青

一桃　表薄紅　裏青

一つぼみ紅梅　表紅梅　裏蘇芳

629
7

終